
ブラザーズLOVE

choco（青い花）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラザーズLOVE

【Zコード】

Z4275P

【作者名】

choco（青い花）

【あらすじ】

この物語は大学1年生の女子大生が 突然の不幸により、付き合つて

1ヶ月のハツカレと遠距離恋愛になるは。

下宿先では全員が同一年という王子ルックな美形4兄弟と逆ハーレム的共同生活を共にする事になってしまった お話です。

時間をみて、800文字以下のページを統合する事と、文章を見直し、修正を行いますのでご了承下さい。（話の内容は変わりません）

更新は今まで通りして行きます。

プロローグ（前書き）

楽しく読んでもらえればそれだけで嬉しいです。

文章の長さに気をつけながら投稿したいと思います。

視点は三人称 多視点。ラブコメティスト？ 中編から長編の予定

次話から本編の第1話となります。

プロローグ

外は春晩の眩しい太陽の光が降り注ぎ、空は気持ちの良い青空が広がる。

町一番の大通りには、すがすがしい季節のため、たくさんの人々が歩いて賑わいを見せていた。

町の看板には日本語の物はなく、道路の標識や信号機の文字も英語で表示されている。

そればかりか、人々が交わす言葉は日本語ではなく英語を使って楽しそうに会話をしていた。

この事からお解り頂けただける様に、ここは日本じゃなくアメリカ合衆国の中の小さな州。

そして、小さな田舎町。

主人公がこの町で平和な日々を過ごそうとしていたところ、突然、思いもしない災難が降り注いぐのだった。

プロローグ（後書き）

これから頑張って書いていきますのでよろしくおねがいします。
誤字脱字など不自然な点がありましたら、どんどん活動コメントや
感想などからお知らせ下さい。

作品を書き切れる様、懸命に頑張る事が目標です。

第1話 突然の宣告？

田舎の町並みが残る風景にたたずむ片瀬一家のリビングで、始まりを告げた。

家族3人で食事をする古びたテーブルに優しく陽射しがあたる。窓からは爽やかな風が入り、カーテンレースを少し揺らして吹き抜ける。

「パパ、リストラされたんだ」

父親が急に口を開いたかと思えば、笑顔で思いもしないひと言。

「……つはい？」

間の抜けた声で聞き返したのはこの家の愛娘である片瀬莉亜。生まれてからずっと暮らしているアメリカ。

入学した大学も、もちろんアメリカの大学。

今年の春に晴れて女子大生になつたばかりだつた。

容姿はといふと両親が日本人なので、見た目からして典型的な日本人。

黒く艶やかな髪、長さはセミロングにスパイラルパーマ。メイクは口に色つきリップをするぐらいのもので、今日もまたノーメイク。そのナチュナルな顔は今もまだ歪んだままの表情。

「今 今、なんて言ったの？」

父親が言つた事が理解できない。いきなりの出来事にもう一度尋ねる莉亜。状況を理解しようと、必死に冷静になろうと務める。朗らかに笑みを浮かべた母親が、状況の把握できない娘に極めて

重大な事をあつけらかんと呟つてみせた。

「やうなのよ~リアちゃん。パパビッシュリストアれちゃつたみたい」

「つて、そんな朗らかに、なにっこの状況を説明しかやつてるのつ!

「ママつ」

莉亞の元々大きくて丸い瞳が、一層でかくなる。両親をキッと睨んだ。

「あら、何そんな怒つてるのかしら。お顔が恐いわ」

父親は娘の気持ちなんか構いなしの様子。

莉亞を氣にも止める事無く、最愛の妻に愛想よく相づけをついた。

7

「そうだね、ママ」「つて、失礼ね!」

莉亞が、いい加減な両親に突っ込んでも、ふたりは平氣な様子。

「リアちゃん、そんなに怒っちゃダメよ」「スマイル、スマイル」

父親がそう言つて、自分の口角を上げてみせる。

ふたりの態度が理解不能に達している為、莉亞は理解に苦しむ。呆れ果て、ため息をついた。

「もつ

」

お気楽な両親に一喝しても、まったく効果なしの現状に、不安げな莉亞。

「それよりもこれからどうするの？」

「あらっ 今度はそんな事」

「そんな事って、ママ……すんごく重大な事だと思つんだけど」

「リアはしつかり者だな。パパすつごく鼻が高いぞつハツハツハ

高らかに笑つてゐる父親の声が、何故だか虚しく莉亞の耳に響いていた。

「いやいや、だからこれからのことなんですけど

「もう、心配性ねえ。リアちゃんは」

相変わらず笑みを浮かべる母親。向かいに座る娘のおでこを軽くひとたし指でツンツンと執拗に突く。

母親の指をこの世で今一番鬱陶しそうに、莉亞がはらいのけた。氣を取り直し、真顔で両親に訴えるのだった。

「それよりもあたしの質問にいい加減真面目に答えて下さって

少しの間沈黙が

「まさか、なんにも考へてないとかじゃないよね？」

引きつる表情を押し殺し、優しく問い合わせた莉亞。
無言を決め込んだらしく、何も反応しない両親。

「つて……何その哀れみの瞳？」

莉亞に指摘されて両親の目玉が不自然な程に宙を彷徨う。両親の態度に彼女は不信感を募らせるのだった。

(どうみてもおかしい態度……)

莉亞が眼光を光らせ睨む。口で言つてもわからない両親には行動で示すのが一番。勢いよくテーブルに手をバンッと叩きつけ、立ち上がる。

「ふたりとも隠してこな事あるない、今のうちに全部吐かせ出しちゃ」

拳を握り締めた莉亞はグイッと体を前のめりに突き出した。動搖する両親を再び睨んだ。

「仕方ないわ。すべて話しましょ、パパ」

「やつだな。説明するから、まあ、まあ座りなさい」

父親に促された莉亞はイスにゆっくりと腰掛ける。

「どう説明すればよいのか、迷っていたのだが」

「この際はつきりと言つてパパ」

「ここまで覚悟を決めた娘に頼まれると迷う事などない」と父親はあっせりと白状する。

「早い話がこの家を出てだな、リア　　君は先にひとつで日本に行く事が決定した」

話の内容がイマイチ掴めない莉亞は、眉間にシワが自然と浮き出る。突然の事で戸惑うのだった。

「何言つてゐる、パパ？　意味わかんない……」

「君にとつて意味がわからないかもしれないが、もつ、決まった事なんだ」

「わん臭い話に、断固、莉亞は拒絕するしかなかつた。

「やだつ…」

「やだつて……」

「こきなつそんな事言われても、納得できなん」

聞く耳持たない莉亞を、父親が聞き分けのない小さな子供を諭す様な口振りで言つ。

「仕方がないんだよ、リア　　いつ事を聞きなさい
「何言われても今はムリだよつ」

父親はいつもフタもない返事を返す娘に困り果てる。
そんな父娘をよそに、のほほんとマイペースで過ぐす母親。ズズ
つと音を立ててすすり飲み、ゆつくりとお茶を味わうのだった。
ふたりの会話をただ聞いていただけの母親が、ふがいない父親に
加勢する為、しゃべり始める。

「あら、断つても住むところないわよ」

「どうして？　この家にこのまま住めないの？」

「いい所に気づいたね。もうこの家はパパ達のものじゃないんだ」

「嘘

「嘘じやないわよ、ここ社宅なんだからあたり前でしょ」

あつけらかんと湯のみ片手に母親は笑つて答えた。

「今年の终わりには二十歳を迎えるだろ。そこで国籍を日本とS.Aどちらかにそろそろ決めないと、といつ訳で、日本に住んでどちらかに決めなさい」

「信じらんないつ勝手にそんな事決めるなんて」

「ちようどいいじやない。ねつだからそんなに怒らなくとも」

「まさかだけど、これにかこつけて夫婦水入らずでなんて思つてないよね？」

再び沈黙。

少しの間をおいて母親が視線を合わせない様にか、あせつての方向をみつめ出した。

「な、何言つてるのかしらあ。後からママたちも日本に行くのよ

「そつや、パパ達が約束破つた事があるかい？」

突然、しまりのない父親の顔が鋭い表情に変わり、娘を真剣な眼差しで見つめる。

逆に莉亞は白い目で父親を見る。表情ひとつ変えずに冷たく言い放つた。

「約束は破られた事はないつ……でも、嘘をつかれた事はしばしるけど」

「子を思う親のちよつとした愛のあるお茶目な嘘じやない」

相変わらず状況を把握できていない母親がサラリと外れな答えを言つ。

無責任な母親の回答にワナワナと身体を震わせている莉亞。何かを溜めている様子。

しばしの間、奇妙な沈黙。

沈黙を破ったのは一気に怒りを爆発させた莉亞。ズイツと顔を両

親の田の前に突き出す。

「ど」が愛があるのつそのお茶田な嘘でね、散々苦労してるんだからね

「まあまあ、落ち着きなさい」

同じ様に立ち上がった父親は莉亞の手を取つてから、真顔でヒッシと手を握りしめて叫ぶ。

「パパ達は神に誓つて嘘はつかない」

手を握る父親はいつになく真剣。

言つまでもないが、娘は呆れた眼差しを当然父親に向けている。誰にも気づかれない様にまた莉亞からため息ひとつこぼれるのだった。

(ハア

)

第2話 とめられない時間？

莉亞はつべづべ思つた。あの両親を信じたのが悪かつた、とそう思いながら、携帯とにらめっこの後、肩を落とすのだった。

遠い目の莉亞は携帯片手に、ふと、数日前の事を思い出す。あんな事にならなかつたら、今空港にはいなし、まして、日本に行く事もなかつたのに、と今更、怒りがこみ上げていた。

(やつぱり行くのやめようかな……)

往生際悪く、そんな事を考へてゐる莉亞は、再び携帯をいじりながら両親からのメールをまた読み返してみる。

受信

FROM パパ

題名 いつもしゃい

200X/05/XX 15:19

日本にさえ着けばきっと大丈夫。
パパの友人の家でも君ならつましくいきよ。
ママも健闘を祈るわ。
と言つただから、遠慮なく日本の生活を
エンジョイしなさい。
パパ達もその内日本へ行くよ。

P・S

言ひの忘れてたけど、
向ひの家の「両親は」不在なの。
「兄弟だけで今住んでいるのよ。
きっと素敵なお会いがあるわ。

メールを読み終えて携帯を閉じた莉亞。携帯を力いっぱい握り締める
「これでもかつと言つぐら」に。身体がフルフル、小刻
みに震えるのが自分でもわかった。

「やつ言ひ事は前もつて言ひてほし」よ……また、騙されたああ
あ

大勢が行き交う空港のロビー中心で、ひとり絶叫する莉亞。

周囲の旅行者やら、ファミリー・ビジネスマン達はギョと驚いた
ようだ。異常者にでも出会つたかの様に彼女の周りをそそくさと避
けて通り過ぎてゆく。

莉亞の近くにいた親子づれの子供が、母親に向かって、こんな事
を不思議そうにささやく。

「あのおねえちゃん、大きなお声だね～ママ
「ひひひそんな変な人指差しちゃいけませんー」

親子の会話が耳に聞こえてきた。莉亞は我に戻ると身体全体の体
温が急上昇中。

(は……恥ずかしい)

身体の火照りがあさまらない内に、搭乗手続きのアナウンスが搭乗ロビー全体に響くのだった。

「どうしよう……あたしの乗る便だ」

戸惑う莉亞はその場でオロオロするばかりだった。

「連絡はしたのに。学くん、どうしたんだろう

」

高原学の事を思つて心配と不安が募る莉亞。何度も周囲を確認するが、刻一刻と時間は過ぎて行く。妙に時間が早く過ぎる感覚に襲われる。

(もう、どれくらい、時間が 経ったかな)

今過ぎた時間の倍は過ぎた様な気がした。もはや、時間の感覚が完全に麻痺している、と感じるぐらいだった。

莉亞は影も形もない学の姿を、フロアから諦めずに何度も探す。それでも、彼の姿はなく、とうとう足元の荷物を掴んだ。限界時間まで、ギリギリ待っていたが、搭乗手続きへ向かうのだった。

第2話 とめられない時間？（後書き）

メールの雰囲気を出したかったので
本文で出てくるメールは挿絵ぐらいに
思ってスルーして頂ければ幸いです。

2-1 ? 11/21 加筆修正しました。

莉亞が搭乗手続きを終えた丁度その時、空港のロビーに姿を現した。その人物こそが付き合つて1ヶ月のハツカレ、高原学だつた。高原学が今まで姿を見せなかつた理由は、目前に受けた講義の時刻にまでさかのぼるのだつた。

レトロな雰囲気を持つたレンガ造の建物がドッシリと建つてゐる。ここには、莉亞が通つていた大学。

とある講義室では30代後半の男性が大勢の人の前で、黒板に小難しい事をスラスラ書いては説明してゐる。それを大学生たちがノートへと真剣に書き写している後景。

その中には講義を受けている眞面目な学の姿もある。そして、隣には「機嫌な様子の藤堂由香が座つてゐる。

しばらくすると、ソワソワする学を由香が横目で彼の様子をうかがつてゐた。何度も時計を見て、落ちきのない様子。

「機嫌だつた由香の表情に異変が生じ始めていた。眉間のシワが文句言いたそうな感じに、ドンドン深く刻まれていく。

由香はだんだんイラだつてきたのが抑えられなくなつてゐる。セミロングの髪を指に絡めては、クルクルと回し、黒板だけを見つめる。彼女は学と視線を合わす事なく、サラッと小声で言つのだつた。

「あの「なあ……もひ、雲の上よ」

予期せぬ言葉が由香の口から、意表を突いて、飛び出すのだった。

「それって、時間が変更したって事?」
「さあ、詳しくわからないけど

「うんじゃないの?」

「なんで、授業前に教えてくれなかつたの?」

「それは……」

学の間に一瞬言葉をつまらせたが、由香はそのまま話し続けた。

「どうせ遠距離になるんだから、今別れたほうが、楽よ」

「そんな事ない。僕たちなら、大丈夫だ。大丈……ふ。だい、じょ

」

学が自分に聞かせる為、何度も同じ言葉を繰り返すが、少しずつ
声がかれて聞こえなくなる。

動搖する学の姿が、由香の胸を少しだけ苦しくさせるのだった。

「それにリアちゃんは、そんな人じゃない」

「彼女より、距離の問題。生身の人間に会えないと辛さだけが募つ
て」

学の顔を見た由香は少し躊躇した。

その間を逃さないよう、学が反論に出る。

「辛いけど……でも、僕は今の気持ちを大事にしたいんだ」
「そんな気持ち、大事にしたって　　すぐに、自然消滅する」
「君に　　君にそんな事決められたくないつ見損なつたよ」

軽蔑する学は、由香に怒りの感情が芽生えるのだった。

由香は学の視線にたじろぐが、必死に彼を説得しようと試みる。

「それは貴方の事を考えてで、遠距離だとお互い、心も
あつと離れる。今なら、まだ」

学は純粹で真っ直ぐな視線を由香に向ける。力強い口調で、言い
きるのでした。

「僕は信じるよ

何があつても、リアちゃんを

2-1 ? 11／22 加筆修正しました。

何とも言えない複雑な表情をする学。彼の顔を見た由香も表情が
震るのだった。

「学……」

彼女は視線を学から、そらすと小さな声で呟く。

「せつのは……嘘

また、ポツリと呟いた由香。

「ホントは……予定 通り、なの」

学は自分の目をしつかり見る事のない由香の顔を覗き込んだ。自分から顔をそらしたままの彼女に声を荒げて責める。興奮して、由香の肩をめいっぱいの力で、わしづかみにした。

「なんだ なんでもそんな嘘つくんだよ」

由香は学に今にでもすがりつきそうなくらいの勢いで、懸命に自分が誤解を解こうと必死に弁解するのだった。

「だつて、このまま遠距離なんて曖昧な関係が続くと、傷つくの学だからつ」

「僕の為に……だつて？」

「学が傷つくのみたくないのつ」

「だからつて、勝手にそんな嘘を

「学の為には嘘しかなかつた」

「そんなの僕のためなんかじゃない！」

怒りに任せた学は冷たく由香に言い放つのだつた。すでに机にあつた教科書やノートを荒々しく片付けては立ち上がる。

「ま、学？」

「予定通りなら、もう行くよ……」

「講義 どうするの？」

「もともと途中で抜けようと思つてた訳だし。もういいだろ？、急ぐから」

由香は立ち去りつとすむ学に、尚もしつこく名前を叫んで引きとめる。

「ちよっと待つて学」

何度も由香に名前を呼ばれても学は何も答えなかつた。無言のままその場を足早に離れる。

講義室には自分の名前を叫ぶ由香の声が響く、それでも講義室を振り返える事はなかつた。

学は予定の時刻より遅く出た講義室を出ると急いで空港へ向かうのだった。

それまで静かだった講義室はふたりのもめ事で、講義室全体の中力がきれた模様。

大勢の学生たちはその騒ぎにノートを取るのも忘れてどよめきだつている。

無論、ここまで授業をぶち壊されて講師が黙つていてる訳がない。

「Hey you! Could I ask you to be a little more quiet」

（君たち… ちょっと、静かに）

学生たちのざわめきを一喝する怒声がマイクを通して、その場に響き渡った。

「I'm sorry」（すみません）

騒ぎを起した張本人、由香の弱々しい声が、静かな教室にヒツソリと響く。それで学生たちが落ち着きを取り戻したのか、すぐに講義は再開される。

由香はといふと、音をたてない様に机の上を片付けていた。彼女の屈折した本能は学を追い駆けるべきだと感じ始めているのだった。

古びたキャンパスの階段を幾つも駆け下りながら、携帯を取り出した。器用に携帯のボタンを押している。電話を掛け終わると校内を走り抜ける。

やつと目的の場所、正門にたどり着く由香。しばらくして、一台の車がそこへ止まる。車は先程呼び出したタクシー。彼女が勢いよく乗車すると、運転手に行き先を指定した。

「To the airport」（空港までお願いします）

「I got it」（わかりました）

後ろを振り返った運転手は焦る由香の顔を見ると、ただ事ではない事を悟り、快く返事をした。

由香はドアが閉まるとき、運転手の背中越しに再度話掛けた。

「Take the shortest way, please」
(近道をお願い)

「It's okay」(いいですよ)

運転手はハンドルを握ったまま再度返事をした。

サイドミラーとバックミラーで安全確認をして、サイドブレーキを上げ、パからロにシフトチェンジ。アクセルを踏んで車はせつと走り出す。

それまで順調に街中を走っていたタクシーだが、空港に近づく事に渋滞で動かなくなってしまう事がしばしばあった。

由香はその度に後部座席で焦り、イライラする。それでもなんとか空港に辿り着くのだった

2-1 ? 11 / 22 加筆修正しました。

学はそんな事があつた為、結局見送りに間に合わなかつたのだ。空港の中心で、莉亞が搭乗した後もフロアに独り立ちつくしていた。

(リ亞ちゃん……)

「 学つ」

誰かが名前を呼んでいると、やつ思つた瞬間、声の方へ振り向く学。自分の方へ由香が駆け寄つてくると、小さく肩を上下させていたのがわかつた。

由香のそんな姿を田の辺たりにした学は、息を切らす彼女を見つめるだけだつた。

「あ～えつと つ」

何も考えてなかつた由香は、どう話掛けたらいいのか、わからずに言葉を詰まらせた。

「わかつた。僕らの事が心配で来てくれたんだね」

由香はどう理解したら、そんな答えが出たのか、理解にできなかつた。それなのに、この状況の中で、見事に見当違いの答えを導き出した彼、余計に答えずらくなる。

由香の予想の斜め上をいつも人とはズレた答えで応えてくれる学。むしろ、口々で違うと答えるよかつたが、彼を混乱させても仕方がないので、平然を装い答えた。

「さうよ、心配で来たけど……何か文句でも？」

「いや、ありがとう由香ちゃん。意外と優しいんだね」

首を左右に軽く振って答えた後、少し苦笑したような表情を浮かべる学。

「それより、間に合ったの？」

「…………ううん、ダメだったよ」

悲しそうな表情の学にそれ以上なんて声を掛けていいくのか、由香は分からなかつた。

そもそもふたりの邪魔をしたのは、プライドの為だけに学を欲しいと思つたから。スタイル抜群で美人の自分をさしおいて、勉強だけしか能のない莉亜に告白したのが、ただ氣に食わなかつた。それなのに、今は学を見つめているだけで、何かが胸を締めつけて苦しくなるのを感じていた。その瞬間、自分の気持ちに初めて気がづくのだった。

(「いの、あたし……が学を好き、になつてる　つて事?）

由香は自分で気持ちを整理しようとパニクッシしている。

学はそんな由香の気持ちに微塵も気が付かない様子。ただぼんやりと立つていたが、何も答えなくなつた由香に声を掛ける氣になつた。

「『めんね。こんな空港の中心で落ち込むなんて、やつぱり

ダメだね、僕』

「…………学」

辛そうな学が可哀想すぎてみていられない由香。こんな時くらい

は優しく声を掛けないとダメだと感じるのだった。

「帰りつよ、学」

「うん」

飛行機に乗つて彼女の元に飛んでいきたいと願つていた。学はまだ動けずにはいる。

「ソレにしても、仕方ないから、戻るつ キャンパスに」

黙つてうなずく学。うしろ髪を引っ張られる思いで見つめる搭乗口。当然、そこにいつも優しい笑顔の莉亞の姿はない。

「行ひつ、学」

学は目の前の搭乗入口を見つめたまま、由香へと無言で頷いた。外を出た瞬間、空を見つめる学の眼差しには、空に飛び立つた飛行機が見えるのだった。

第3話 最悪な旅立ちはじめに出会い...?

(前書き)

題名と内容を変更しました。

第3話 最悪な旅立と出会い?

莉亞は搭乗手続きを終えても空港フロアに歩がきていなか、何度も振り返る。

すると、間違いなく莉亞の視線の先には学が
認した瞬間、他の搭乗客にゲートの先へ追いやられてしまつた。結局飛行機に搭乗する事に。

莉亞が飛行機の外を見つめながら物思いにふけつてゐる間、飛行機は何事もなく無事空港を離陸。

ふと隣に視線を動かす莉亞。隣にはチャラに感じの男性が座つている。

気づかれない様に男をなんとなく観察する莉亞。

全体的にやや長めの茶髪。肌はやや褐色^{いろいろ}。特に田鼻立ちがハッキリとした美男子。

そして、姿勢や顔から判断すると同じ年代^{じねん}ごと莉亞が考えていた　まさにその瞬間。

「あの　、」

と、隣の男が声を掛けってきた。

思ひもよらない出来事に莉亞は動揺を隠しながら迷惑そつな顔をした。

「な、なんですか？　何か用ですか？」

それまでさわやかな笑顔だった男の表情が変化。ピクッと片方の眉毛を上げる。

「愛想がない態度だな」

「へラへラして、愛想がありすぎる貴方よつマッシです」

「俺がいつへラへラした?」

「今、してた様にあたしには 見えましたけど」

「俺のは愛想笑いつて言つんだよ。まあ、アンタのその仏頂面よりはマッシだろ?」

「貴方、女性には優しくしなさいって習わなかつたの?」

「女性ね……それはそれは失礼、お穢ちゃん」

それ以上返すだけ労力の無駄と感じた莉亞はブイッと男の反対側に顔をそらす。

「 つたく、可愛くない女」

座席に肘を突き、男が呆れた表情で小さく呟いた。しつかりと莉亞の耳に男の言葉が届く。

「 なつ、」

莉亞が言い返そとした時、制服に身を包んだ1人の女性が彼女たちの座席の目の前に現れる。

「あのお客様、お静かにして頂けますか? 他のお客様が痴話ゲン力をうるさーと申されておりまして。もう少し、小さな声でお願い致します」

キャビンアテンダントは通路にしゃがみ、見事な営業スマイルでやんわりと注意した。通路側に座っていた莉亞が申し訳なさそうに謝る。

「すみません」

「お願いしますね

そう言って、笑顔を浮かべたC・Aが立ち上がる。彼女は自信に満ちた表情でさつそと自分の持ち場に戻つて行くのだった。

最悪な旅立ちと出会い　？

「あなたのせいで怒られたじゃないですか！」

「それはこっちのセリフだ」

「それにカッフルって、誤解されて迷惑ですっ」

「オタクも迷惑かもしけないけど、こっちはそれ以上に大迷惑して
るよ、誤解されてな」

「なつ　声掛けてきたのはそっちでしょ？」

「ケンカ売ってきたのはそっちが先だろ？」

「別にケンカなんか売つません。それに」

莉亜は自分からこんな事を言つてもいいものか、と言葉を止める。
そんな詰まる彼女の言葉をオウム返しで聞く、チャラ男。

「それに　なんだよ？」

モジモジして、口をゴー！ゴー！させた莉亜は視線を合わせ様と
もせず、ひと指し指をひつきりなし、グルグル回しながら落ち着き
なく言つ。

「どうせ、ナンパでしょ？　だから、声掛けてきたんでしょう？」

「……はつ？　誰が？」

「だから……あなたが」

「誰を？」

「あたし　を」

莉亜はどうといふ自分の事を指してアピール。が、男の質問攻めに
だんだん自信がなくなる始末。

痛い子を見るかのような慈悲に満ちた瞳の男。そして、うわざり

「うう、何をぐだらない冗談、言ひてるんだか」

「な、何をぐだらない冗談、言ひてるんだか」

田が点になつた彼は無表情でモジモジする莉亞を凝視。

「だつて……現に声掛けられたし……」

「勝手な勘違いだな。声掛けたのは、今アソタガ思いつきつ踏みつけてくれてる俺の搭乗券取つてほしいから」

「へつ？ 踏みつけてる？」

とぼけた声の莉亞は自分の足元を慌ててみる。

「……ホントだ」

「わかつて貰えたなら、つたとそれをいつに貰えないか？」

冷めた口調の男は無言で莉亞の田の前に手を出す。
搭乗券を拾つと恐る恐る田の前にいる呆れ顔の男性に手渡した。

「はい、どうぞ……」

ふたりの座席に不穏な空気が流れた。

最悪な旅立あと出会い　?

日本に到着するまでしばらくかかる為、莉亞は身体を休めるのに数時間仮眠していた。

頭をコツクリコツクリと揺らしている莉亞は肩のコリを感じ始めたと同時にズッシリとした重量感のある重みも感じ始めていた。

(つむか……重い。確実に何か乗つてる　肩に)

閉じた瞳を恐る恐る開けて見る。肩にはあの男性の頭が。緊張で彼女はどうしていいのかわからず一瞬固まっている。もう一度肩を確認すると、確かに彼の顔が寄りかかっていた。スマスヤと気持ちよさげに眠る男性の顔を莉亞はまたなんとなく観察する。

(まつ毛　長いんだ。やっぱり、鼻筋が通つてて彫が深いな。男の人の割りに肌も綺麗)

こんな間近でマジマジと莉亞は男性の顔を観察した事がなかつた。もちろん、女性の顔も。ただ、脈が不整脈にあまりにも動くので、鼓動の速さに　自分自身ついていくてなかつた。

完全に油断していた莉亞の耳に思いもしない声が舞い込む。

「なあに、見惚れてるんだよ　俺の顔に。痴女」

片手を開けた男性が莉亞の顔を見上げながら、寄り掛つていた自分の頭を彼女の肩からどける。

その瞬間、心臓が止まるぐらいに驚く莉亞。

一気にその顔が真っ赤になると、餌をねだる金魚の様に音もなく

口を動かしている。

言葉が声にならないが、うろたえながらもなんとか自分の言い分を言葉にする。

「ななな何つ、バツバカな事言わないで下さい！」

「なんで俺が、いつの間にバカ呼ばわりなんだよ」

「へ、変な事言つから。ただ……あたしは頭が肩にあつたから

「それで……」

白けた瞳の男性。そんな彼の問い掛けに、当然 莉亞の言葉は続かない。

「何も言わるのは自分に非がある事に気づけたんだな」「気づいてませんし、それに非なんてないです」

「あるだろ。さつきの勘違いだつた訳だから」

「さつきの事は置いといて。で、今は肩にのっかてた事です」

「んつ？ 肩悪かつたな。つい色気がないから、気が緩んで」

「 色気が、ないつて」

「当機は只今着陸準備に入りました」

「お客様はお座席のベルトを着用をお願い致します」

「言われたく」

「当機は只今着陸準備に入りました。お客様はお座席のベルトを着用をお願い致します」

計算でもしたかの様にアナウンスが莉亞の言葉へと見事に被せてくる。繰り返されるC・Aのアナウンスが機内に響く度に、戦意喪失ぎみの彼女はしゃべる事を諦めて座席のベルトを大人しく装着するのだった。

第3・5話 USAより愛をひめて？

色鮮やかな屋根をしたオシャレな家や真新しい高級・高層マンションがある街並みの中、そこにはひと際、古い家が建っている。それは黒い瓦の屋根がトレードマークの家。他の一軒家とは明らかに違う雰囲気。今時の町並みについている家こそが莉亜の下宿する榎本家。

家の中の若い男性はもちろん泥棒ではなく、れっきとした家の住人。

二重の丸い瞳が可愛いらしいう印象の好青年。彼は茶髪のサラサラとした毛を少し揺らしながら、意味なく家の1階から2階を徘徊している。

何故か落ち着きがない。ソワソワした様子の男性は榎本良人。

良人は5分前に上つた2階へまた上がる。
2階には階段から続く廊下。

左右には廊下を挟む様にして壁がある。その壁にはそれぞれ左右3つのドア。そして、廊下のつきあたりにはもう一つのドア。

全部で7つある部屋から、迷わず良人はひとつの中を選んだ。部屋はアメリカから送られてきた荷物がバランスよく配置されている。

そう、この部屋には片瀬莉亜の家具が既に設置済みになっていた。

たつたひとりで良人が下心　　もとい、淡い恋心から、遙々来る莉亜のために夜中から朝方にかけてセッティングした。寸分の狂いもなく、彼の目の前にはキッチンと家具が並んでいる。満足げにその部屋を見渡し、嬉しさで顔が自然と緩む。

「片瀬さん喜んでくれるかな？ くれるといいんだけど……」

「おい、良人。部屋見て何ニヤニヤしてんだよつ、気持ち悪いな」

眠そうな表情の男性が眼を擦りながら声をかける。

彼の身体つきはサッカー選手を目指している為か、良人よりガッチリとしている。

色黒でいかにもスポーツ青年と言う感じで男らしい話しか方。良人と比べると少し鋭い目。

そんな背後からの祐大の声に良人は驚くと思わず部屋から出いでた。

音も立てずに背後に忍び寄っていた彼をいぶかしげに見る良人。

(いつから居たんだよ？ いつ)

USAより愛をこめて　?

「いや、別に俺は何も」

ドアを閉めながら良人は何食わぬ顔でシラをきる。振り向く彼の顔を見るなり、緩んだしまりのない口元を指差す祐大。

「良人つ、よだれつよだれ！」

「つえ　　つて、んなわけないだろ！」

ツツコンだわりには自分の緩んだ口元をしつかりと腕で拭う良人。祐大はそんな彼をジト目で見ながら、呆れた様な口振で言うのだった。

「どうせ、下宿にくる女の事でも考えてたんだろ」「いや、別に考えてたわけじゃないんだ」「よく言つぜ。朝から落ち着きなく、家中ウロウロ。つたぐ、うるさくてゆつくり寝られやしねえよ」

申し訳なさそうな表情で良人はチラリと彼の顔を見て謝る。

「それはごめん……」

「今からは静かにしろよな。うかれるのはお前の勝手だけど、いい加減にしろよ」

そう言って、何もかもお未透視だからなつと、言わんばかりに祐大は口元を二ツと吊り上げた。

「なんだよ、その何か言ったそうな表情は？」

「まあ～な。良人……みなまで言つた」

「何をだよ？」

「さては、お前、惚れたな」

「ちち違う、違うんだって。な、何言つちゃつてるの？」

「なんだよ、隠してんじゃねえぞ。誰でもわかるつて」

「ちがつ ただ落ちつかないんだ。ちゃんと彼女無事に日本に着

くか

「んつとにそれだけか？」

「そ、それだけだよつ。し、しつこい奴だな」

（どうでもいい事にはやたらす、鋭い奴だな……こいつ）

感の鋭い祐大の目から、逃れる為、顔をそむける良人。それでも、どもる声だけはどうしようもなかつた。

「そつそそれだけって訳でもないからな。リュ、龍も確か今日帰つてくるはずだろ？」

「……ついで、的な感じだよな

龍の事は」

「つ、ついでじやないぞ、念を押すけど。あ、あいつの事も俺は心配だよ」

「まついいけど、俺にはどちらにしろ、どうでもいいからな」

祐大の冷めた態度に、彼の人良さげな表情が変わる。
良人は強い口調で言葉を発した。

「そんな言い方ないだろ。龍之介の事心配じやないのか？ 僕はふたり共心配なだけだよ」

「俺はお前みたく、人間ができるねえからな。他人を心配できるようない間じやねえよ」

眉間にシワを寄せて険しくなった表情をする祐大。悪意を込もつた言葉で答えた。

「心配するのに人間性とかは関係なくない？ それに俺たち兄弟だろ？」

「そう言つところが、またうぜえんだよ

いちいち

「なんだよつ、うぜーつて！」

廊下に良人の声が響くと、彼らが立つ部屋の向かいからドアを開ける音がする。

ふたりは音の方を振り返る。

ドアから顔を覗かした男性が、迷惑そうな表情にメガネをかけて言つのだつた。

「……静かにしてくれるかな。朝から近所に迷惑」

妙に落ち着いた話し方。ふたりとは格が違つぐらい物静かで逆に他人からは冷めた人間に思えるぐらい。彼は表情一つ変える事なく、彼らふたりに視線を送る。

USAより愛を「」めて　?

「ああ、悪い。兄貴」

祐大に続き良人もドアから顔を覗かせる男性に答える。

「ごめん、慶太。朝からうるさかつた?」

慶太と呼ばれた男性は祐大の双子の兄で、彼らは一卵性双生児。祐大のほうは全体的に短めで左右の長さが違う髪形。

慶太のほうはインテリ風のオシャレメガネを掛け、髪形は緩いペーマを全体的に掛けたフワツとしている。

顔が瓜ふたつでも性格、話し方、服の好みなど、他にも色々違う点があるが挙げればキリがない。

そんな双子の兄は顔だけ部屋から出して、彼らに皮肉っぽく言いつ。

「朝からそんなにもめる様な重要な事、ふたりにあるの?」

「いや、ない。ただ、こいつが朝からドタバタうるせえーしつ」

「だから、祐大つそれについては何度も謝つてんじやん!」

「その方が朝からうるさいし、近所迷惑。くだらない争いはやめてくれよ」

「くだらない事じゃ……ないと」

「じゃつどれだけ重要な事なのか、教えてもらえるかな?」

「重要とかそういう問題じゃくて、コレは」

「なら、朝から子供じみた喧嘩やめれくれよ、ふたりとも」

「俺も? 兄貴、含む事ないだろ俺」

くらうとした悪気のカケラもない調子の祐大をキッと睨みつけてから冷たくあしらう慶太。

「祐大、お前も同罪」

「へえ～へえ～わかりましたよつ兄貴」

減らず口の祐大を慶太が見事に無視する。彼は怒りの矛先を良人に。その目は苛立ちに満ちた様子。

「それから、夜中に模様替えはやめてくれよ。非常識、なおかつ迷惑だ」

「ホントつ昨日からつるせえーし、寝不足だ。その上　朝から口レだしな」

慶太に便乗した祐大はひとつひとつの言葉を嫌味を盛る。文句を「「「どぞ」とばかりに得意げに浴びせた。

言つだけ言うと慶太は自分の部屋に引っ込んだ。

逆に双子へ文句を言いたげな表情の良人だが、言える度胸もない。

(いつも嫌な事は押しつけるくせに……今度の事だつて、俺だけで

)

この事がキッカケで片瀬莉亞の両親から手紙が来た日を思い出した。

USAより愛をこめて　?

「んっ、この　手紙、確かに……親父が言つてた女の子の」

そう言つて、家の郵便ポストから一通のエアメールを取り出し、それを片手に足早と自分の部屋に向かう良人。

部屋に入つてからスチールパイプ製で造られた小さな机へと、迷う事無く一直線に向かつた。

イスへ座ると丁度手の届く所に文房具が入ったカンカンに手を伸ばす。ハサミを取り出して封を切る良人。

「えーと、何々。拝啓、突然のお手紙失礼致します」

手紙にはつらつらと達筆な字で、日本語の文章が書いてあつた。

「私共は旧友であるお父様に今回の事ではお世話になり」

長々と書かれている文章をはしょりながら、黙読していると、良人の目を引く文章が。それは娘を想う両親の想いが込められた文章。

彼女は頭が良く、他のお嬢さん方と比べても、遙かに愛くるしい娘なのです　ウブなのでしょうか、今までにボイフレンドを紹介された事がありません　、そこまで読むと良人が手紙相手にツッコム。

「つて、今時そんなウブな子いるのかなあ。それで続きはと」

手紙に視線を戻す。視線で文章をたどる良人。こちらで素敵な男性と巡り会つてくれると、親としても安心で　、良人はさら

に読み続ける。

「ふんふん、それで何々」

娘の写真を同封したのを「」覽になつてみて下さいね」と、締めくくられているのだった。

「なんて言うか 間違いなく、本人の許可を得てないな」

(悪意はないと思うけど、それがないだけ 余計性質が悪いだよなあ。こういうタイプの人たちは)

とりあえず、良人がは封筒の中を興味本位で覗いた。窮屈そうに写真1枚入っているのを確認してから、それを引張り出すのだった。

「期待はできそつにもないな……にしても、俺迎えに行かなきゃならないし」

裏向けになつた写真に視線をむけ、しばしの間考える。

(フツ ピちらにしても、過度な期待はできないだらう、な)

ひとり何か納得したらいぐ、頭を上下に軽く頷すかせた良人。

「よしそ……いずれにしても会つ訳だし。今なら幸い心のダメージは少ないはず」

意を決した良人は裏返つた写真を表にする。瞳を何度も瞬きさせた。

写真は頭で想像した容姿とはかけ離れた女の子が写つている。

中年夫婦の間には黒髪の可愛らしく小柄な女の子が微笑む。それは幸せな家族をそのまま切り取った感じの写真だった。

想像していた以上の結果に、思わず良人は写真の莉亞を見る度一ヤニヤする。

「……超可愛いいい」

USAより愛を込めて　?

机に倒れたまま良人が写真をニヤつきながら執拗にみる。手紙の事など一切知らない慶太が玄関先から2階に聞こえる様に大声で今だ写真でニヤつく彼を呼んだ。

「良人つ下に降りてきてくれ」

慶太の声が余程大きかったのか、リビングでくつろいでいた祐大は部屋から様子見に玄関先へ出てくる。

「アイツ聞こえてるのか？　だいたい部屋に引きこもつてさつきから何やってんだか？」

「何しているのかは知らないけど、呼んだらすぐ来てくれないと」「兄貴、直接呼びに行く方がいいんじゃないのか？　所で何の用なんだよ、良人に？」

「ああ、それが……」

困ったような顔を見せる慶太は玄関のドアの方へ行くと、音をたてながら引き戸を開けた。

玄関の先の道路に1台のトラックが止まっているのが祐大の目に映る。

「なんだつなんだ？」

間の抜けた声で祐大は外から視線を慶太に向かって訴えた。

「……親父が言つてた下宿人の荷物らしいんだ。で、さっきから道路のどこで待つてもらつてるんだけど」

「適当に運び入れてもらえばいいじゃん。何も良人に頼まなくても
運びいれる部屋がわからないから、わざわざ呼んだんだよ」
「なるほどな」

「しょうがない奴だな。ひとが呼んでるのに」

慶太が玄関をそう言って見上げるとつられて祐大も階段をみた。
ニヤつきながら良人が階段をやつと降りてきた様子。

良人の緩んだ口元が視界に入つた祐大は気に食わない様子。彼が
階段をおりきつた所で睨みつける。

「何ニヤついてんだよ、気持ちわりいな　おめえは
「べ、別になんでもないよ。でつ、用つて何？」

「下宿人の荷物頼んだ。今から勉強するから、静かに運び入れてくれ
れよ」

「はつ？　荷物……つて、どこに？」

「外のトラック」

慶太の言葉の意味がわからない様子の良人は困惑気味に言葉を繰
り返す。

「トラックつて……」

「だから、外つってんだろ。外見てみ、ホレつ」

玄関外を指差した祐大に促されて良人が渋々玄関を出ると、3人
程筋肉隆々のお兄さん方がにこやかにこちらを見ている。その光景
に呆気にとられたまま固まっている良人。

「良人、頼んだぜ」

祐大の声でハツと振り返る良人。何食わぬ顔のふたりは元居た部

屋に戻るとしていた。

「つて、おいつ待て。手伝うよね……ふたりとも」
「なんで俺らが手伝うんだよ。どうせ暇だろっお前は
「暇つて……」

「祐大と同じく。当然 暇な人間がするのが当たり前だと思つ」

あまりの理不尽さに弱々しいながらも発言する良人。

「いや、なんて言つか……家にいるなら手伝ってくれてもいいよね
？」

慶太がふと考える素振りを見せる。彼は左腕を横にした上に右腕の肘を置いて、軽く顎を支える。

考える様子をしばしの間うかがわさせた。

「 納得できないのなら、多数決で決めようか?
「いやつ、もういいです……やります」

(多数決じゃ、意味ないだろ……てかつそれ……ただの数の暴力だから)

この時もふたりに諦めの境地に立っていた良人。

「おいっ良人っ良人っ」

良人の耳に水をさす声がした。その瞬間、ハツと時を戻される。
どれだけ時が経ったのかはわからないが手紙が来た日の回想から一
気に意識が現在に戻る。

「やばつまだ髪の毛もセツトしないよ」

良人は無造作な髪の毛に右手を伸ばし、左手にはシンプルな飾ありつけのない腕時計を見る。時間を見て慌てだす始末。祐大の前を通り越した彼はそのまま階段の方へ急いで駆け出した。

急ぐ背中に向け大声で祐大が叫ぶ。

「おいつ俺も出掛けんだからなつ戸締りしとけよ
「わかつてゐるつて、やつとくから」

階段を急ぎ下りながら適当に返事だけを残し、祐大の視野から一瞬にして消える良人。

廊下で立ち尽くす祐大は呆れた顔で相変わらず頼りないと改めて認識した。

(肝心などこが抜けてるよな、アイツ)

祐大も仕度するのに部屋へ戻るのだった。

第4話 ティーのお世話をどう? (前編)

タイトル改名しました。

第4話 テイーのお時間ですよ？

機内は着陸準備にはいり、莉亞の頭上のランプが点灯する。それは座席の上に幾つかあるマークの中のベルトが点灯。着陸するというアナウンスが流れ、機体は徐々に降下し始めた。

少しずつ滑走路に近づいては停止位置に何事もなく無事に着陸する。しばらく走り続け、機体はそのままゆっくりと速度を下げ停止した。

着陸した事がアナウンスされると、座席に座っていた人々が一斉に機内から降りる準備をし始める。

その中には莉亞の姿も。頭上の棚に腕を伸ばして荷物を取るが、手を伸ばした先のどこにも荷物がない。他の搭乗客が彼女の荷物をどうやら奥に押し込んだようだ。

「まいっちやったな、奥まで行つてしまつて届かないよ」

何度もとなくチャレンジするが、棚の中でもなしく空を切る莉亞の手。

「やつぱり、ダメだあ～」

困った顔の真横を太くてたくましい腕がニユツと後方から伸びてきて、いとも簡単に奥に入り込んだ棚の荷物を引きずり出す。

何もできずに視線の先を眺めていた莉亞。驚き振り返った背後にはあの男性が無表情な顔で荷物を持ち立っているのだつた。

無言のまま男性が腕を莉亞の方へ伸ばす。彼女はまだその状況を理解できないらしく、身動きひとつできずにいる。

男性は何もいわず、莉亞の腕に荷物を無理やり押しつけ渡す。

唐突な出来事に戸惑っていた様子の莉亞も自分の腕の荷物を黙つて受け取り、確認してから途切れ途切れに男性へ一言だけ発する。

「どうも……あり、が、と、う」

「礼ぐらい、もう少しかわいい笑顔で言つたら　どうなんだ？」

「それはどうも」

男性に言われっぱなしでイラつく莉亞は苦虫を碎いた様な笑顔で答えた。

「うわっ、アンタの笑顔最悪だな」

莉亞の笑顔と言えばいいのか、微妙な表情を見た男性は続け様に同情でもするかの様な口調で、スッと腕を組んだ。そして、次に不思議そうに軽く首をかしげる。

「どんな女でも一番かわいく見えるもんだろ？　まださつきの方が
マッシだな」

「余計な、お世話です」

男性は自分から視線を外した様子のぶつちよう面な莉亞をシゲシゲとみて、心に溜めた言葉を勢いよく噴射する。

「んつとにっ！　かわいげがないね、アンタ」

「それこいつ大きなお世話ですー！」

(ホントつ嫌な奴つー！)

キツと男性をひと睨みしてから莉亞は捨て台詞を吐き捨てた後、小柄な体格をズカズカと機体を揺らしそうなくらいの足取りで機内

から空港へ飛び出して行くのだった。

ティーのお時間ですよ？

空港へはトンネルの様な通路が続いている。機内出入口前にはズラリと人々が並んで外に出る順番を待っていた。

その列に従つて莉亞も並ぶ。しばらく待つと空港へ続く通路からフロアに出て、入国検査の場所へと進んで行く。検査が無事終わると税関を抜けてからやっと荷物のあるフロアにたどり着くのだった。

搭乗者のトランクが乗せられてグルグル回転しているレール。

早速近づいて自分の荷物を探し始める莉亞。

何度目かのレールが周回し終わった時、赤色で光沢のある見慣れたボディーにグリーンのバンドが付いたクリスマスカラーに目を奪われる。

莉亞が家を出る時に目立つようにトランクをクリスマスカラーに「一ティネットしておいたから、そのお陰で迷わず手に取る事ができるのだった。

トランクを手に莉亞がその場を去るうとフロアから移動するも、無数の空港出入口に足が自然に止まる。予定では空港に迎えが来る手はずなのに、今だそれらしい人影が発見できず。

莉亞はどの出入口から外に出れば良いのか、さっぱりわからず。さ迷い歩き疲れていた。もはや、口からでは息と泣き言。

「全然わかんないよ……出口が」

疲れた様子の莉亞へと、男性が数メートル前まで接近していた。不適な笑みを携えた男性がクリスマスカラーのトランクを引きずる

彼女に声をかける。

「おーーー」

「アアアー」

(ま、また……)の人)

「アンタ、あと何回空港を周る気なんだ？ 隨分、独りで楽しそうなんだな」

嫌そうな様子の莉亜を一蹴した男性。競歩選手みたいな歩き方の彼女を何処からか見ていたらしく、クスッと鼻で笑う。

「それよりつあたしに突っかかるつてくのやめてくれませんつ！ 何かしました？」

「んつあえて言つてもいこなら言つカビ

「どつするへ..」

小バカにしたような男性の意味ありげな口調で、何が言いたいのか莉亜は察知する。

「もしかして、まだ機内の事持ち出すの？ だつたら答へはソロッ！ 結構です」

男性から離れたい莉亜はその場を逃げようとするが、男性に進路を阻まれる。そのせいでぶつかった拍子にポケットの財布が落下。そのまま空港の床を直撃する。

莉亜の小さな肩がわなわなと震えだす。

「これはあたしに対して、なんの冗談？」

ピクピクと表情筋を動かす莉亞。引きつった顔で無理に微笑もうとするが、大きな黒い瞳だけは笑っていない。

「いや、冗談も何も
ただけだろ」

アンタが俺の行く方向に突っ込んでき

中身は見事に飛び出しフロアへおもこおもこに口ロロロと転がる。

四方八方に飛び小銭をキャッチしようとハカルな動きをする莉亞を見た男性は横で腹を押さえて笑い出す。

「もうつ笑つてないで散らかつた小銭、貴方も一緒に拾つて下さい」

「お、俺も拾うわけ？」

「そうつ。こういう時は困つている人を助けるのが人の……優しさだと、思うんですけど」

「優しさ、ね……」

「なんですか、その 文句言いたそうな目は？」

「別に なんでもない」

「それとも人が困つてゐる、見て見ぬふりですか？」

「俺もまあ、鬼じやないんでね。協力させてもらひよ。でもアンタの場合はその方が良さそうだけだね」
「それはどうも、」協力つありがとう」といいますつー」

男性に見られないよつて、顔をそむけて、ブーたれた顔をして、不満そうな莉亞。

ふたりは散らかつた小銭を拾い集める。

見える範囲内の最後の小銭を男性が彼女のもとに届け渡す。

「これで終わりだと思うけど。本当に次か次にやらかすの好きだな、アンタ」

「それは……どうも」

(別に好きでしてる訳じゃ……ないんですけど)

とことん疲れたと言いたそうな表情をする莉亞。財布に渡された小銭を入れるのだった。

「これだけ迷惑かけられたら、礼でもしてもらわないと割りに合わないな」

「お礼って程の事もないと思うんだけど……」

「こういう時はお礼するのが人としてのマナーだと、思うね」「はいはい。それで、どんなお礼をしたらお気に召しまして?」

「余計な運動もさせられた事だし、喉も渴いてるから飲み物でも頂こうか」

男性がそついいながら指差した方向に雰囲気のいいカフェがある。

カフェは透明の壁に沿つてズラリとテーブルや座り心地の良さそうなソファがいくつも並んでいた。

莉亞がその内の出入口から一番手前の小さなテーブルの上に荷物を置いて席を取る。

なんとなく透明な壁に視線がいく莉亞。壁はプラチックの様な素材で造られていた。フロアの様子もよく見える。

お陰で、莉亞は透明の壁を熱心に穴があく程突っ立つたまま見入る。

(もしかして……ここに居る人達からさつきの私の姿見えたのかな?)

そんな事を考へている莉亞に男性が座るように促す。そして、莉亞の注文を聞いてからカウンターへと飲み物を買いに行く。
少し火照った様な身体を深く腰掛けて座る莉亞。ソファーの艶々

した革が冷たくひんやりしてちょうど良い感じに気持ちがいい。

モスグリーン色のソファーが落ち着きがない莉亞のお尻を優しく包み込んでいる。ソワソワしながらカフェの様子をあちらこちら見渡す。

莉亞の視線の先には不思議な光景が。十数時間前、飛行機に乗る前は全く関係のなかつた人とカフェに来ている つまりは、何も知らない男性、と。

ティーのお時間ですよ？

ふたつのカップを乗せたトレーをテーブルに置くと男性の方から莉亞へ話を切り出してきた。

「で、アンタ旅行が何かで来た訳？」

「何故、そう思うんですか？」

飲もうとしていたカップをテーブルの上に置くと逆に尋ね返した莉亞。

迷いなく男性はシリウスとした瞳で、莉亞の顔をみて答える。

「同じ場所でうわうわしてたら……誰でもわかるだろ？」「

「それって、私をずっと見てたって事？」

「んつ見てた訳じやない　俺が居る場所に何度もアンタが現れてたけどね」

男性の言葉に莉亞は何も答えないで、ムツとした表情へ無意識となる。

(なんだ、もうわかつてゐんじやない。わざわざ尋ねなくてても)

黙つたままの莉亞の姿で、彼女が答えなくとも質問の答えを察知した様子の男性。

「否定しないって事は図星だな」

「べ、別に貴方に言う必要もないでしょ」

「だな、俺も特に興味はない。世間話だ　ただのね」

「一応、父親に知らない男には気をつけろって、言われてるもので」

「ほお、パパの言付けを守つてるつて訳か。それは懸命だな、お嬢ちゃん」

言葉とは全く裏腹な表情で、皮肉を皮肉で返した男性の顔が無表情な顔から満足気に変わる。

莉亞はその男性の言葉と満足氣な表情にカチンっときた様子。

（お嬢ちゃんつて、ヒトが一番氣にしてる事、なの）

男性の嫌味を心の中で受け止めては、またもピクピクと動く顔の筋肉を抑えようと、莉亞は冷静に一言だけ返すのだった。

「そ、それはビリウム……」

皮肉の応酬を最後に会話がとまると男性はトランクとは別の黒いA4サイズのバックから一冊の本を取り出す。本には本屋で買った時そのままカバーがついてあつた。

目の前の莉亞には気にも留めてない様子で、男性は本をお構いなく読み始める。

しばし、ふたりの間には沈黙が続くのだった。

そして、沈黙を破つたのは莉亞でもなく男性でもない、どこからともなく流れ出したメロディ。

それは莉亞の傍で鳴つていたが彼女にはきこ覚えのない機械音。音に反応したのは男性で、彼は鞄からある物を取り出す。手にしたのは折りたたみ式の携帯電話。携帯を開き、メール受信を確認した様子の彼がおもむろに鞄に手を伸ばすのだった。

「悪い、俺はもう行くから。飲み物サンキューな

それだけ言うと男性は立ち上がりざまにテーブルの上の自分の本やらを鞄に片付け始める。

何が起つたのかわからない感じの莉亞が、ソファから立ち上がった男性へとりあえず質問した。

「あの、何かあつたんですか？」

「いや、別に、仕事なだけ」

「ああ。携帯、仕事の連絡だつたんですね」

「そう、それじゃあな。知らない男にはくれぐれも気をつけろよ、お穢ちゃん」

そう言つと男性は莉亞に皮肉を返す間も『えず、カフ』の出入口付近に移動した。

（ホントにつ 最後まで嫌味な人！）

第5話 NO・1の覚悟 ? (前書き)

ijiから第5話に変更しました。

10 / 26 choco

第5話 NO・1の覚悟 ？

カフエを後にした男性は人気ない静かな場所に移動する為、空港から出る。

男性は先程の落ち着きぶりはどこへいったのか、ソワソワ落ち着かない様子で、比較的静かな道路で携帯を取り出した。携帯画面にはメールのマークが1通の表示。

男性がメールを開けてみると、期待していた相手とは違う相手からだつた。

「良人のメールか……」

落胆した男性はメールにサッと目を通すだけで、返信もせずに携帯をとつと片付けたようとした時、手に持った携帯からメロディーが鳴る。タイミング良く今度は電話の着信。彼はうつとうしそうにボタンを押して、電話に出る。

「もしもし、龍之介？」

「もしもし、俺だけど。良人か？」

「うん、もう空港に着いたよ。どこにいるの？」

「今空港の近くの道路にいるから」

「わかった、こっちは空港の駐車場にいるよ」

「OK、そっちにいくから、待つってくれ」

「了解」

しばらくして空港の駐車場で待っていた良人の目に人影が。遠目に見ても目立つ服装に髪型。

その動きのある無造作ヘアに綺麗に流した長めの茶髪を揺らしながら現れた。

服装の方は到底良人では着こなせないようなファッショ n。

白い柄物シャツに黒い細ネクタイをして、黒い面パンに白いベルト。モデルのようなスタイルに身のこなし。

その男性の身なりで誰なのか確心できた良人は少し遠目にいた彼の名前を読んで呼び寄せた。

「龍つ！」

龍と呼ばれた男性は榊本4兄弟のひとり、榊本龍之介。

名前を呼ばれた龍之介が声のする方に視線を向ける。良人が大げさに腕を伸ばし振つて、アピールしているのがわかつた。

「待たせたな、良人。荷物はこれだけだから。俺、仕事に行くから」

龍之介が旅行の荷物を良人に差し出す。

受け取つた荷物を車に積み終わつてから龍之介の方を振り返る良人。

「うん。俺も下宿しに来た彼女迎えに行くよ

「なら、話は早いな」

「じゃあな、龍之介」

「ああ」

お互ひ話終わると別れの合図をして、別々の方向に歩いて行く。良人は莉亜が待つ空港の方へ。地下からエレベーターに乗つて空港のフロアへと。

龍之介は仕事に向かうため空港とは反対の方向へ。しばらく見慣れない道を行くと最寄駅に着く。改札に切符を入れると電車に乗つて仕事場へと向かう。

窓から流れれる景色をジッと凝視したまま、電車に揺られる事、数十分。

龍之介の目的地にへ到着。彼が電車を降りて駅を出ると辺りは薄紫色に染まっているのだった。

NO・1の覚悟　?

繁華街へと着く頃には更に太陽が沈み、暗くなっていた。暗闇の中、無数のネオンが美しく、そして妖しく光輝く。通り沿いにはスナック・キャバクラ・風俗やらが、たくさん建ち並んでいる。中には必死に客を呼び込みをしている店もある。

そんないつもの後景をかわしながら、龍之介は自分の勤めるホストクラブを目指す。

ホストクラブの建物が見えると、関係者入口がある裏側へと回り込む。

裏口から中に進むと龍之介は更衣室のドアを開けたのだった。

灰色の2段ロッカーがいくつも並んでいるそこには龍之介程ではないが、そこそこの美男子が着替えているとこに、龍之介が挨拶してから更衣室に入つて行く。

「おはよう」

数人の後輩ホストらしき男性が次から次に気合の入つた声で挨拶をする。

そのうちのひとり、ホスト君Aが不思議そうな表情で龍之介に声を掛けた。

「あれっ今日は同伴出勤じゃないんですね？」
「今日はちょっとね」

ロッカーから視線をホスト君Aに向けるが質問に答えるとすぐに視線を戻す龍之介。

「珍しいですよね」

ホスト君Aはよっぽど龍之介がひとりで出勤してきた事が信じられない様子。

龍之介がローカーにまた手を伸ばし、自前の服を店様の衣装に着替える。ボタンをひとつづけながら、首を傾げる。

「そうか？」

既に着替え終わったホスト君Aが龍之介の着替える近くで、尚も食い下がる。

「はい、だつて俺が知る限りはほとんどお客様と一緒にじゃなかっただすかあ」

ホスト君Aの言葉に反応する男がもうひとり。

「そういえば……」

「そう言いながら、」の会話に参加していくホスト君B。何やら思い出した様子。

「確かによく同伴で出勤が多いいっすよね」

「まあ　たまにはそういう事もあるだろ」

ロッカーからネクタイを取り出し、内側のロッカーの扉にある鏡を見る。結びつけ終わってからブランド物のジャケットの袖に腕を通す龍之介。ジャケットを両手でピンと張る瞬間、気持ちが引き締まるのだった。

「それより、お前ひつ」

着替え終わった龍之介が氣合のこもる声でホスト君たちに声をかける。いつになく氣合が感じ取れる龍之介の声に身が引き締まったような彼らは敬礼でもするかのような返事。

「はいっ」

「今日もヘルプ頼む。俺がいない席でのお客様のフォローしつかり頼むぞ」

「もちろんっ任せて下さいー!」

「俺がN〇一なのはお前のフォローがあつての事。だから、これでも感謝してるんだ」

ホスト君たちにねぎらいの言葉を言つてから、ポンッと軽く片手でそれぞれの肩に触れる龍之介。

「そんな俺らの憧れなんすよ。龍之介さんは

何処か自慢げなホスト君たちの顔を複雑な表情で、黙つて見守る龍之介だった。

(憧れ
ね)

NO・1の覚悟？

煌びやかで輝きに満ちて、天井へと散りばめられたシャンデリアが吊り下げられている。まるで中世のお城を思わせる程、ゴージャスで夢の様な空間がロッカールームから埃っぽい廊下を進んできた龍之介の視線の先にある。

壁や床は大理石を使用。もちろん、フロア全体にはアンティークを思わせる様な豪華なテーブル・ソファも無数に存在しているのだった。

普通の生活をしている人間ならば、ため息が出そつた程の別世界。

ホストクラブというの 簡単に説明すると女性をお客の対象として男性版キャバクラ。ホストによっては店外でお客様と連絡を個人的に取り合い、店に一緒に出勤をする同伴出勤や店が終わってからも一緒に過ごすアフターとか、人気ホストの手助けや場継ぎなどの補佐的な役割をしているヘルプがある。

フロアでは仕事始めの朝礼が始まろうとしていた。他のホストと同じ様に龍之介も、煌びやかなお客様用フロアに並ぶ。

「みんな、今日もしっかりと稼いでくれ。今週も龍之介が売り上げNO・1だ」

マネージャー（店の責任者）が何処となく嬉しそうに言つとフロア全体に観衆の声と拍手が響く。

「今日もござやかなようですね」

突然男性の声が、マネージャーの背後にいつの間にか長身で三十代前半のグレーのスーツを着た男性が、スラリと立っている。斜め後ろ横には二十代中盤くらいのキレイで清楚な女性がたたずんでいた。

「オ、オーナー、高科オーナー。これはこれは、今日はなんの用でいらっしゃいますか？」

「自分の店に来るのに理由がないと来てはいけませんか？」

「いえ、そうではないのですが……」

マネージャーが言葉に詰まるときオーナー（店の所有者）と呼ばれた男性はフッと嫌味な感じで微笑む。

「近くに来たものですから、寄つてみたのですが」

「今日は奥様もご一緒に。今日は一段とお綺麗でお美しいです」

「ああ、たまの休日で一日一緒に珍しく過いでいるのですよ」

にこやかな感じの高科は傍にいる女性に視線を向け、まるで名前を慣れ親しんだ人を呼ぶ様な口振で声をかけて見せる。

「なあ、ちと」

そのオーナの様子とは裏腹に呼ばれたにも関わらず無言のまま、返事をしようともしない女性。

「今はどいつも機嫌ななのよつでね」「はあ……」

気のない返事をしたマネージャーがふたりの様子に戸惑いの色を隠せない模様。

NO・1の覚悟？

ちやとの態度はいつも事で、氣にも留めていない高科はそれ以上彼女の事に触れる事はなかった。

この場の嫌な空気を変えたいマネージャーが額の汗をハンカチで拭いながら高科へ声を掛ける。

「オーナ、今回もこの店がどの店舗よりも売り上げが良くてですね……」

それ以上言葉が出ないマネージャーの脣からまつむおこが無くなつて、喉はカラカラの様だ。

静かなフロアにはマネージャーの生睡を飲み込む音だけが響く。

「——この店舗にとても優秀なホストがいるときもまだしが」「やうなんですよ、オーナー。神本龍、のす」

得意の話題に飛びついたマネージャーが、龍之介の名前を呼ぶとした瞬間、何かに気づき、表情が凍りつく。
口元もむくマネージャーに会話の続きを言わせようとして、田々しい態度の高科。

「どうされたのですか？ 遠慮せずにその先を話して頂けませんか？」

マネージャーは自分へと発言を促す高科を横田にチラッと見る。
尚も声が出ず、また生睡を飲み込むだけ。

「まあ いいでしょう。貴方が何を言おうとしていたかはわかり

ますよ。私も一応口のオーナーですからね

冷静かつ無表情な顔の高科が、嫌味な口調で凍りついたままのマネージャーに代わりに発言する。

「そ……ですか、オーナー」

「一番売り上げに貢献しているのが榎本龍之介と、言いたかったのでしょう。それじゃあ、今後もせいぜい頑張ってくれたまえ、榎・本・龍・之・介くん」

先程、ちさと と、呼ばれた女性はその名前に反応しては、ハツと顔を一瞬変化させた。

ちさとの表情を高科が横目で確かめ見ると、何かを核心した様子。険しい表情の龍之介が高科の顔を睨み、誰もがわかるくらい、明らかに彼を敵視する。

「はい、頑張りますよ 高科オーナー」

龍之介には言葉をかける事無く、面白くないといつ様な表情の高科。

「行くぞ」

その場に居るの事が苦痛に感じたのか、眉間にしわがよる。一緒にいる数人を引き連れ、高科は気に入らないといった感じにその場を去つて行くのだった。

突然の出来事にマネージャーはボー然と立っていたが、咳払いをしてから、その場を仕切り直す。

「んつ……急な事だつたが、これから開店だ。それぞれしつかりと

頼むぞ」

「はい！」

ホストらは全員が声を揃えて息ピッタリに返事をする。それぞれが開店準備をするのに各自準備し始める。

NO・1の覚悟？

開店すると店はいつものように満員で大盛況。そんな中、ホストの待機場所で暇な2名が噂話に夢中の様子。

「今日のマネージャー気の毒そだつたな」

「そうすね。そう言えば、マネージャー高科オーナーって言つてたつすけど、もしかして、あの高科コンツェルンの御曹司ですか？」

「ああ」

先輩ホストは視線を左右に泳がせて周りを確認してから、新人の耳傍まで寄ると声のトーンを落とす。

「大きな声じや話せないが 高科夫人と『』のホストが『』てるんだよ」

「えつじやあ、今日来たのつて、それを確かめる為つすか？」

「かも、知れないな」

後輩は「ゴクッ」と喉をならしてから、質問した。

「でつだ、誰つすか？」

「龍之介さんだよ。この店の連中は、みんな、薄々気づいてるけどな」

「そなんすか？ 知らなかつたつす」

「お前は新人だから、仕方ないさ」

無駄話をしているヘルプたちを、いつの間にか、マネージャーが睨んでいるようだ。眉間にしわをよせ、ヘルプたちの所へ近づいてきた。

「おい！ わまえら暇ならヘルプにでも入れ。無駄話ばっかりして
るんじゃない」

「はい！」

「ヘルプですね」

それまで、余裕だつた彼らは一斉に立ち上がる。

ふたりの顔はさつきまで緊張の文字すら、うかがえない表情だったのが、一瞬で凍りつくのだった。

マネージャーはそんなヘルプたちを引き連れ、龍之介のテーブルに来ると耳元で用件を告げた。

「マコト、あちらからも『指名だ』

「はい、わかりました」

龍之介が小声で返事をする。手に持っていたグラスをそつとテーブルに置いた瞬間、横にしな垂れがかっていた年配の小太りな女性が、何か察知しのか、甘ったれた声を出す。

「あらあ～マコチャン、私を置いていくこともありますかあ？」

煌びやかに着飾った服に身を包んだその女性はふくよかな体を立ち上がりうとする龍之介の太くて血管の浮き出た腕にグイグイと無駄な贅肉を押しあてながら引き止める。

「すみません、ですがご安心を。戻つて来るまでこいつらがお相手しますので」

龍之介の視線の先には彼程ではないが、美形のヘルプたちが傍で待機していた。

席から離れようとする龍之介を恨めしそうな眼で見つめるマダム。そのまますぐ傍にいたヘルプたちが視界に入る。

「まあ、この子達もなかなか、カアイイじゃないのぉ
「はい、かわいがつてやつて下トセー。マダム」

龍之介は高価な指輪をいくつもしているマダムのパンツとした手を、やさしく手に取る。そして、手ではなく頬へ軽くキスをした。

「それではマダム、少しの間、失礼致します
「もうマコチャンつたら、うまいぢあますね～パンツとか、一番高いお酒頼んでおくぞぁ
「はい、お気遣いありがとうございます。では、マダム」

少し距離を取った場所から、一部始終見ていたヘルプたちは、龍之介の接客ぶりに感嘆の声を上げる。そこへ龍之介がすれ違ひざま、彼らへ耳打をした。

「大事なお客様だから頼んだぞ、おまえら
「はい！～」

ふたりにその場を任せた龍之介。今夜、何度もなるかわからぬ指名のテーブルへと、また移動するのだった。

龍之介が忙しいと、それにつけ、店もお客様へパフォーマンスするホストたちで、お客様フロアはドンドンにぎわやかになっていく。今日もまたイルミネーションが、繁華街のどこの店よりも輝きを増した。

いつものように夜が明けるまで、ホストクラブは、今宵も営業し

続けるのだった。

NO・1の覚悟？（後書き）

この話はこれで終了。

次回は第6話になります。次回投稿までお待ち下さい。

第6話 オレシレシコホコハーショノ?（前編）

新しい家へからおこしにシコチコハーショノに変更しました。 10
/ 19 23:53 ohooco

第6話 おいしいショチューニューション？

龍之介が去った後、取り残されたままの莉亞が、ソファーで口を半開きの状態で数回瞬きをする。

汗をかいだガラスコップに手を伸ばし、ストローを掴んだ莉亞。凄まじい勢いでミルクティーを飲み終える。気分がそれで落ち着くと時計を確認した。

「わるわる口でゅうくつしてる場合じゃないよ」

急いでテーブルを片付け始める莉亞。それが終わると、カフェの返却口に向かう。食器を返し終わった時、視線が外へ。そこから見えるのは空港の外部に出るフロア。

再び歩き出した莉亞はカフェを後にすることだった。

フロアに出来る階段を下りて、しばらく歩いた莉亞。丸い大きな目にはひとりだけ目立つ男性が映った。

男性は手に布を持ち、それには何か文字が書いてある。この場所からだと遠く、よく見えなかつたが、その事には気にも止めず、どんどんフロアを進む事に。進むにつれて、男性の持つ布の文字が、自然と読み取れてしまう。

それを見た莉亞は一瞬、自分の目を疑がつた。

田の前には
【片瀬 莉亞】の文字。

「う、うわでしょ……」

結構、恥ずかしいかもしない、という思いが、莉亞の頭に駆け巡る。瞳が丸くなつたまま、一步もそこから動けない。出入口付近

にいた男性が、自分の方へ急ぎ足で駆け寄って来た。

「あの、片瀬莉亞さんですよね？」

男性はそう言つて、自分に微笑んだ。悪い人ではなさそつた微笑みに、少し安堵すると答えた。

「はい……えつと、はじめまして。これからお世話になります」「いらっしゃりこそ、はじめてまして。榎本良人です」

お互い軽めに会釈して、古典的な日本の挨拶を済ませた。起き上がりざまに榎本良人と目と目が合った莉亞。それとなく愛想笑いをしてみせる。

良人は生身の莉亞を田の前にして、釘付け状態で動かなくなつた。

「あの、何かついてます？」

莉亞がいぶかしげに良人を見た。急に視線を逸らす。

「えついやつ、何もついてないです」
「そう……、一瞬見つめられた様な気がして」
「すゞく笑顔がカワワイイなつて」

良人は莉亞の照れ笑いがたまらないのか、自分も同じように頬を淡いピンクに染める。

今しがた照れていた莉亞は、良人のきき慣れない言葉に驚く。思わず、彼の言葉をオウムの様に繰り返した。

「つカワワイイ……あたし、が、ですか？」

「あついやつ、その つハイ」

「その、えつと……社交辞令でも嬉しいです」

「いやつ社交辞令なんかじやないよ、ホントに」

「ありがとう、すごく照れるなあ」

「そうだね ハハツ照れるよね」

良人は普段なら言わない事を言つてしまつて、後悔した。

(俺、完全にチャライやつだつて思われてる……よ)

話し終わると良人が促がす方向へふたりは空港から出る。
良人だけ空港下の駐車場へ移動する為、莉亞は彼に言われた場所
で待つ事に。数分後、空港前の道路に車が止まり、車から降りて來
た。

おいしいショチューニング？

「『』めん、お待たせ」

待っていた莉亞に駆け寄ると、良人が彼女の荷物に手を掛ける。

「この荷物は車の後部座席に入れるとね」

「はい、お願ひします」

「ロロロと車に運んだ。キャリーケースを後部座席に入れてから、ふたりはそれぞれ乗り込んだ。

良人は運転席に。莉亞は助手席に乗り込んでシートベルトをする。

「今から、早くても2時間ぐらいに家に着くかな」

良人が車のドアを閉めながら、言つとエンジンをかける。

「2時間つて結構遠いいんですね」

「うん、もしアレだつたら、どこかで休憩してもいいし。遠慮なく

言つて」

「はい、そうちますね」

車が走りだしてから、ふたりはとりとめのない話をしていたが、ネタもつき、車内には走行する車の音しか聞こえなくなつていた。緊張のせいかチラチラと莉亞を気にしながら、注意散漫の良人。沈黙に絶えられない様子の彼はMDの再生ボタンへ視線を向ける。

「あ、音楽いいかな？」

「えつ？はい、ビババビババ」

車内に音楽が流れ出すと莉亞がおもわす口づさんだ。

「恋なんて～ンンンンンの～シーソーン～、あつこれ知つてます！」

「あつ知つてる？」

「はい、すゞく有名な方の昔の歌ですよね」

「うん、そうそう。この歌結構好きなんだ」

「そうだ、最近の歌の流行つてなんですか？」

「うーんと、やっぱり♪ポップかな。今はアジアのアイドルグループも結構人気があるかな」

「へえ。そなんだ」

音楽を口づさみながら、しづらいくの間聴いていた莉亞は疲れがどつと押し寄せてきた。車の揺れがちょうど心地よくなると睡魔が襲う。いつの間にかしながらも、ギリギリ意識を保つていたが、どんどん意識が薄れてゆき、そのまま夢の中へ。

目が覚めた莉亞が車窓から外を見ると、たくさんの家々が建ち並ぶ街の中を走っていた。彼女は手で口すりながら体制を整える。

「あ、目覚めた？」

「はい、あたし寝ちゃってたんですね」

「うん、よく寝てたみたいだね」

「よだれとか、出てなかつたですか？」

「うーん、ちょっと出てたかも」

「えつ、ホントですか？」

まだ寝ぼけてる莉亞は良人の一言で目が覚めたのか、急いで自分

の口を指で触る。

「うそつうそつ「冗談だよ」

「えつじょ「冗談？」

「ごめん、ごめん」

「ふうん、結構いじわるなんですね、良人くんって」

少し不機嫌そうに言った莉亞の頬がブクッと少し膨らむ。

「あっそうだ、もうすぐ着くよ」

バツが悪そうな良人は話を逸らそうと、話題をすり変える。良人に言われて、また車窓の方を見る莉亞。周りには家が程よく立ち並ぶ場所に、一戸建ての黒い瓦の大きな家が見えてきた。莉亞が視線の先の家を指差して聞く。

「もしかして、あれですか？」

「うん、そうだよ」、

良人は答えてから、ハンドルを切る。曲がり角を曲がった。

空港から走行し続けた車はやっと榎原家の裏側にある道路に到着した。そこから車庫に入る。

車を止めて降りるとふたりはそれぞれ荷物を持って家の玄関に移動するのだった。

まだ誰もいない家の鍵を開けると、莉亞を玄関に招き入れる良人。

「今日からここが俺たちと一緒に生活する家だよ」

莉亞の目の前には、はじめてみる光景が広がる。

「……が、これからあたしの住む家、

玄関立ち止まつた莉里はマジマジと家の中を見て、これからの生活を思いながら呟いた。

おじしゃショナコハーショノ?

先に玄関をあがつた良人が声を掛ける。

「どうぞ、あがつて」

「はいっ お邪魔します」

「それじゃあ、早速家を案内するよ」

先頭に立つ良人は得意げに家を案内し始めた。

莉亞は返事をしてからピッタリと彼の後ろにくつひいて歩く。

「リリはコビングで。あと、向いの廊下の入り口からお風呂と洗面所にいくので」

「はい」

「それとあそ」はキッチンだから、好きな時にでも使って」

「はい」

「じゃあ、次は片瀬さんの部屋だね」

「あつ…はい」

ひと通り簡単に1階の部屋を案内すると2階へ。

頑丈そうな階段を上ると2階の廊下部分に通じている。廊下を挟んで左右にある壁にはドアが3つずつあって、廊下のつきあたりには1つだけ別にドアがあつた。

「あたしの部屋は?」

「片瀬さんの部屋はね、俺の部屋の隣の隣だから」だよ

指指した部屋の前までふたりは移動すると、少し躊躇しながら、莉亞が聞く。

「「」……入つてもいいかな？」

「もちろん、今日からこの部屋は片瀬さんのものだから自由に使って」

「はいっありがとうござります」

嬉しそうに莉亞がペコッと良人にお辞儀をする。

莉亞の可愛らしい姿を見て、みるみる内に表情が緩む良人。恐る恐る部屋のドアを開ける莉亞。部屋にはアメリカの家と同じ見慣れた家具が並べられていた。

ホツとした様子の莉亞がゆっくりと部屋を見てまわる。

莉亞をみていると嬉しくなったのか、テンションが上がった様子の良人。夢中で部屋の話をし始めた。

「「」の部屋なんだけどさ。実はひとりでセッティングして、家の奴が誰も手伝わなくてさ、大変だつたんだ　いや、気にしないで。大変だつたとかは別にいいんだ。ってかいつもの事で慣れるし俺。それより……片瀬さんの事を想いながら　」

良人は自分の苦労話を、ゆっくり間をためながら話す。最高潮に感情が高まるとき最後のセリフ共に莉亞を振り返る。

「つて、あれつ。片瀬さん？」

振り向いた良人の目の前にはベッドで座つた形のまま横に倒れて動かない莉亞の姿が。疲れ果てていたのか、彼女はベットで寝息もなしにスヤスヤと寝ている。

そつと彼は近づく。ベット前に音をたてないように座つてから、目の前にある無垢で無防備な寝顔を見るのだった。

「片瀬さんの寝顔、やばい可愛すぎるよ」

顔が緩みっぱなしの良人。その上、瞳が完全にハートになってしまっている。本人は何も気づいてないのか、間違いないく、誰が見ても彼を痴漢と間違う様な状況。そんな状況の中、しばらく彼女の寝顔を彼は心ゆくまで堪能したようだ。

満足した表情の良人は優しく莉亞の身体を、布団の中へひとつひとつ丁寧に収納していく。最後に掛け布団を彼女に掛けようと近づいて、布団を持って掛けようとした瞬間、今まで一番顔が接近した。すると、ある善からぬ事が脳裏に浮かぶ
今、この家には自分たち以外誰もいないという事が。

(この状況は男にとってはおもしろい)

そして

⋮ ⋮ ⋮

少しずつ莉亞の唇に引っ張られるのを、本能が支配するまま受け入れる
万有引力のことごとく唇に引き寄せられていく。

(やばっ
理性が吹っ飛びそうだ。もう……止められない)

柔らかな唇に触れるか触れないかの距離で動きを止める。

莉亞の寝返りで、我に返った良人。腰が碎けたかの様にズルズル床に沈む。魂が抜けた様な様子で少しの間へたり込んでいたが、立ち上がり、フラフラと部屋を出て行くのだった。

第7話 ウリフタツな彼女

2階から意氣消沈気味にドッと疲れた様子で降りてきた良人。 気分変える為、キッチンへ移動する。キッチンの様子をドアから覗く。すると、中に誰か人がいる気配。

「あれ？」

人影に近づいたら、朝大学へ行つた慶太がキッチンのテーブル近くにいる。

ついさっき帰宅したばかりの慶太はキッチンで、用事を済まそつと何かしていたようだ。

「あれ？ いつ帰ってきてたの慶太？」
「今さつきだけど」「

そう言つて振り返つた慶太は、今度は何か思い出している模様。

「ん」と、確かに誰かさんが女の子の寝込みを襲い掛けてた時かな

「+ × #*」
「驚き過ぎだよ。別に何しようと勝手だけど」「う、うん……」「合意の上での事じゃないとしたら」「じゃないとしたら？」

慶太の言葉に喉仮が上下に動かし、ゴクっと生睡を飲み込む良人。 そんな彼を冷たくみてから、自分の指で支える様な感じで顎を軽く触る。

「まあ 犯罪者になるだけだから」

「……」

「俺に迷惑かけない範囲なら、良人が何しようと興味はないけどね」

「……」

慶太の一方的な言葉が深く突き刺さった。参ったな、という様子の良人。手で顔を覆い隠す。自分の軽はずみな行動にとてつもなく反省した。

「その、なんて言うか。つぎは気をつけますです……ハイ」「別にキミの問題で俺には一切関係ないからね」

冷笑する慶太は何事もなかつたかの様にまた用事をし始める。良人はあんまりにも恐ろしい慶太の冷笑に、身体が強張るのを感じずにはいられなかつた。

「そ、そうだね ははっ」

その場にいるのがより一層恐く感じる良人。強張った身体を無理に動かして、移動しようと試みる。思う様に身体が動かせず、テーブルに身体をぶつけたりしながらも、キッチンをやつとの思いで脱出するのだった。

良人の態度が可笑しくてたまらない慶太。笑うのを必死にこらえる。その表情を見られないよう、床に顔を伏せた瞬間、視線の先に何かあるのが、わかつた。

ウリフタツな彼女？

落ちている物を拾い取る。

「これ 良人の学生証」

手に取った瞬間、ヒラヒラと一枚の写真が落ちてきた。

「ん 写真？」

裏返つていてる写真を拾い見る。そこに写った女の子の姿を見て驚く。

写真には家族に囲まれて微笑む莉亞の姿があった。

「慶太、そこに学生証落としてない？」

廊下から良人の声。

声に反応したのか、青ざめていた慶太が素早く写真を学生証に挟み、もとの落ちていた場所に戻す。

「し、知らない」

探しながら部屋に入つて来る良人。彼の目線の先に学生証が無造作に落ちているのを発見した。学生証を拾い上げてから慶太の方を見る。

彼はなぜか身体を小刻みに震わせながら、顔が強張っていた。

「なんか顔色悪くない？ それに震えてる様だし」

「別に……なんでもないから」

「そ、う。 気分が悪いなら病院にでも行くといいよ」

「ああ、そうだね」

青ざめたままの慶太はひとことだけ言ひつと、一歩ずつ足取りを確かめるように、キッチンを出て行くのだった。

慶太のおかしな姿が良人の目に焼きついたまま消えない。その場で不思議そうにつぶやいた。

「あれ？ 用事……は」

部屋に来てから、複雑な顔つきの慶太は、良人が持つていた写真の事を考えていた。

あれからずつとベットに横になつたままで、天井のどこかを見つめている。

おもむろにベッドから起きあがると机に近づく。鍵がつけられている引き出しを開けると、中にはひとつだけひつそりと写真たてがあるのだった。

慶太が写真たてを手に持ち目を細めた。その瞳には悲しみが満ち溢れている。

視線の先に「写る少女は莉亞に瓜一つ。隣には少年が今までにないくらいの幸せそうな表情。誰がみても、幸福そうな未来ある少年少女の写真」。

そんな写真に何度も語りかける慶太。

「キリの声が今は何も聞こえない……今日も微笑むだけだね」

少女の姿を何度もやさしく指でソッとなぞる。

慶太が写真に触れる度、微かに黒い瞳が寂しそうにゆらめく。そのまま心の奥にでもしまつかのように、思い出がある大事な写真た

トをもつて、この問題を解くためには、

ウリフタツな彼女？

部屋で落ちこんでいる慶太をよそにテリカシーのないもうひとりの双子が大学から帰宅。

玄関から帰宅そうそう、腹から声を出して、全力で叫ぶ祐大。

「お~い、もう迎えには行つたのかあつ？」

家中に響く声を静止させる為に良人も、また玄関の方へ全力疾走する。その奇妙な姿が、笑いのツボにハマつた祐大。面白い余興でも見ているような気分になるのだった。
良人の氣も知らず、大声で笑い出した。

顔を歪めて、近づいて来る良人。

良人は自分の口元にひとさし指を立たせた。今だこの状況を理解していない祐大にすごい剣幕で注意する。

「シイイイイイイ。うるさい！ 祐大もつと、声小さくしろっ！」

しかめつ面の良人を見た祐大が、不思議そうに玄関をあがつた。

「なんでだよ？」

「慶太も体調悪そしだし、彼女も疲れて寝てるんだから」

「ふうん、どんな顔してるか見に行くか」

階段を上がり掛けた祐大の腕をわしづみ、自分の方へ引きずりおろす良人。彼は今、祐大を莉亞に近づけない事が、自分の使命だと思いこんでいる。

「やめろよ、そんなデリカシーのない事、女の子なんだから」

祐大が良人に掴まれた腕を、汚いゴミでもはらうがの」とくかい
つぱい振りはらうのだった。

「冗談だろバアカ。何、マジにしてんだよつ

半分呆れた様子の良人がふざける祐大を横目で見る。

（まつたく、こいつ何処まで冗談なんだか……）

そんな事もあって、階段から離れる祐大。その後ろピッタリと金魚の糞のように何処に行くのにも良人が執拗について歩く。

「鬱陶しいから俺についてまわるな」

階段の所まで用事を済ませてから祐大がまた戻る。
それでもまだ離れる気がない様子の良人。

「祐大の事だし、何があるかわからないから」

「マジで行く訳ないだろ。俺疲れてるから、部屋で休む」

「それならいいんだけどさ」

「興味ないから安心しろ」

「興味ないって言つてもこれから、共同生活が始まるわけだし」

階段を1段上るとピタリと止まって、うつとうつしそうに祐大が答える。

「だから、それがなんだよ?」
「不自由な事もあるだろし」

「　　で？」

「彼女、女性な訳だし」

「　　で？」

「俺たちは男だし」

「あんな、男と住む以上、何があつても文句は言えないぜ」

「いや、何かあつたら困るよ、俺」

「んじゃ、お前が困らない様にしてやれよ」

その言葉を最後に階段を荒々しく一気に駆け上がる祐大。

「だからああああ静かにいいいい！」

良人は遠ざかる彼を最後まで階段下の場所から見張るのだった。

第8話 秘恋 ヒレン

世間が眠りについた頃、龍之介もまた仕事を終えて帰る途中だった。

閑散とした繁華街を歩いて駅にひとり向う途中、目の前に一台の車が止まる。

この時間には少々不似合の車。黒光した車は高級車のマークもついて、いかにもお金持ちが乗りそうなベンツだ。

車のドアが開く。そこから美しい女性が降ってきた。彼女は上品な立ち振る舞いにブランド品を身にまとい、セレブの奥様風。あの有名な高科財閥御曹司の妻、高科けいさとだった。

「龍クン！」

「ちさとさん、大丈夫なんですか？ 高科にみつかったら

「大丈夫、高科が眠ったのを確認してから、屋敷を出たの」

「そつか。でも あの人は？」

車のそばに居る白髪の老人に視線を向けた龍之介。

黒い背広を来た小奇麗な老人が、龍之介の視線に気がつき、軽く会釈をする。

「あの人があたしたちの味方よ。何も心配ないわ」

「では、奥様わたくしはさがつておりますので、御用があれば御連絡下さいませ」

「ええ、ありがとう。古谷」

お辞儀をした古谷がベンツに乗り込むとそのまま車は暗闇に消える。

状況をいまいち飲み込めてない様子の龍之介にちさとが説明した

のだった。

「いつも彼が手伝ってくれていたのよ

龍クンに会つて

「そう」

頷く龍之介は愛おしそうにちさとをみつめ、少しピンクがかった頬にやさしく触れる。次に艶やかなくちびるへ、そつと指でなぞる。彼女の身体をグイっと、自分の方へ引き寄せた龍之介。細く頼りなさげな身体を壊れない様に包み込む。

「龍クン？」

龍之介の腕の中で、小さく名前をただ呟く事しか出来ない、ちさと。

「ちさとさん、すぐ会いたかった

「あたしもだよ」

ちさともまた、龍之介に応える為、彼の身体に手をまわして、同じ様に力を込めて抱きしめた。

それから、ふたりのくちびるが重なり、息もできないくらいキスをする。お互いのくちびるが腫れ上がる程、何度も何度も繰り返し、くちびるをまじ合わせた。

どれぐらいの時間、ふたりは抱き合つていたのか 本人たちもわからなくなる程だった。

ちさとは大きくて広い暖かな龍之介の胸に、うずくまり尋ねる。

「龍クン、あのあと大丈夫だった？」

心配そつなちさとの顔に視線を落とす龍之介。

「なんで？」

ちさとも龍之介の顔へと視線を移す。

「色々嫌な目にあつてないか、心配で心配で」「それで……わざわざ口口に?..」

「 うん」

不安げな表情のちさとを、また強く抱きしめた。

「俺なら大丈夫だよ。ちさとさんこそ、高科に何かされてない?」「あの後はイヤヤミな事言われたぐらいかな。でもね、平気なのよ」「どうして?」

龍之介の胸に顔をうずめるちさとが、恥ずかしそうに答える。

「だつて 龍クンに会えるから、ガマンできるのよ」「ちやとちやと……」

ちさとへの愛おしい気持ちが抑えきれない龍之介は、抱きしめる腕の力がより強くなつた。

そんな力強く抱きしめられた腕から、悲しそうな表情で、ちさとはそつと離れる。

「そろそろ、帰らなきゃね」

携帯を取り出して、ちさとは先程の古谷とこう執事に電話をした。数分後、また黒光りのベンジがどこからともなくふたりの前に現れ

る。

ベンツの運転席から降りてきた古谷が後部へ。後部座席のドアに触れて、音を立てない様、静かに開けた。

「奥様、お時間が。お乗りください」

「ええ。龍クン、また会いに行くから」

「ちやとせん、高科にもし何かされたら、いつでも飛んでいくから」

「うん、ありがとう」

古谷に催促され、ちやとせんはゆっくりベンツに乗り込む。背を向けて歩いて行く彼女を、今すぐにでも引きとめたい衝動が走るが、今はただ龍之介には見送る事しかできない。

なぜなら、ある条件でちやとせんは高科の御曹司と結婚していたからだ。

ちやとの父親は事業に失敗して何億という借金をしていた。その借金を返済するかわりに御曹司と結婚するという条件だった。

それを知ったため、本来、事業を立ち上げるのに貯めていたお金を、今はちやとの為に貯めている。

第9話 やわらかな感触？

同時刻、目が覚めた莉亞は静まりかえった榎本家を徘徊していた。

「ノド渇っちゃった。下において水でも飲もつかな」

その言葉で始まり、暗闇を徘徊する事10分。キッチンに莉亞はやっとたどり着くのだった。

電気のスイッチを壁からさがす為、ペタペタと手の平で壁を触る。

「あつた」「

莉亞がパチッと音を鳴らし、キッチンのスイッチを押す。部屋は電気で見る見るうちに照らされた。

キッチンは目が眩むほど明るい部屋に。暗闇に目が慣れていた為、何度もマバタキして、光に目を慣れさせる。

目が明るさに慣れた莉亞はシンクに歩いて行く。近くに置いてあったコップを何気なく掴んで、水道水を注いだ。彼女はそれを一気に喉を鳴らしながら、飲み干した。

「プフア～！」

ビールを一気飲みしたおっさんの様な声を出す。

口の周りを拭きながら、飲み終えたコップをシンクに置いて、キッチンを改めてうががい見る。誰もいないはずの階段の方から、物音がきこえて来た。

「んつ？ なんか……物音が」

物音がきこえる方を莉亞は息を殺しながら、近づき見る。入口から顔を恐る恐る出す。そして、耳をすませるのだった。

「何も キイれない。気のせいだつたのかな」

暗闇を見つめたままの莉亞が、身体を震わせる。

(なんか いわいかも)

「部屋にもどりや」

悲壯感漂つ顔で、暗闇を心なしか莉亞は早歩きで歩く。一気に部屋まで戻り、自分のベットへ一疋散に潜り込んだ。

(……お酒、クサツ)

莉亞は鼻に手を覆いながら、もう片方の腕を布団から伸ばす。その先にあつたスタンダの紐をつかんだ。そのまま紐を引っ張つて、灯りをつけた。

まだベッドの中では、お酒の匂いで、顔を歪めたままの莉亞がいる。お酒の匂いがたまらなくなつて、下から一気に掛け布団と一緒に、彼女は身体ごと起き上がるのだった。

布団からでた莉亞の目に向かいの壁がとび込んだ。

スタンドの灯りで、壁にはもつひとつのあるはずのない人影が、浮かびあがつていた。その瞬間、榎原家中に、恐怖とパニックで悲鳴がどどろく。

人影はその悲鳴を聞くなり、目の前にいる莉亞に襲いかかる。も

み合つうちにふたつの人影は重なり合い、バランスを崩してベットから落ちた。

家中にけたたましい爆音の様な音が鳴り響く。

(痛くない んつ何? 柔らかい、感触)

田をつぶつていたのをゆっくり開ける莉亞。同時に部屋の扉も開く。

やわらかな感触？

「な、何してんの？　お前！」

知らない男性の声に続いて、莉亞にとつて聞き覚えのある声も聞こえた。

「か、か、片　瀬さん、口が口が」

激しく動搖する声の主は良人。目の前の信じがたいショチューエーションに、ショックが隠せない。その場で崩れる様に座り込む。

（な、何かのまちがい。そつそつ、これは夢なんだ
だとしたら……）

「あ、悪夢だ……」

良人が言つとおり、悪夢なのかもしれない。何をどうしたら、そんな器用なマネができるのか、人生初の体験を莉亞は思わぬ事故で済ましていたのだ。

「ング　フング」

口がふさがつた状態で、声にならない声を出す莉亞。真下にいる男性の唇から、自分の唇を必死にはがした。

キスの呪縛をなんとか解いたが、莉亞は放心状態。

男性は自分の身体からいつまでも動こうといない莉亞に、シビレを切らして声を掛けた。

「重い　早くどうしてくれ」

それでもピクリとも動かない莉亞。

今だ上に莉亞がいる為、うめき声のよつた声が、男性からもれた。

苦痛の声に反応する莉亞。真下にいる男性の顔をぎこちなく見る。その瞬間、瞳が一層丸く、いつもより大きくなつた。

「あなたはっ」「あなたはっ」

「ゲッまた、あんたか」

莉亞の顔が見えて、嫌そうに吐き捨てた男性。そして、馬乗りになつっていた彼女を遠慮なく、身体から落とした。落とされた莉亞は今だ部屋でしりもちをついて、座つたまま。扉の所で良人と一緒にいる男性は、部屋にいるふたりをからかうよつた口振りで言つ。

「来て早々、やつてくれるぜ」

良人たちとは別に、廊下にはもうひとり男性がいる。その男性が、冷淡な表情で言い放つ。

「確かに、ね」

聞き慣れない声の方を立ち上がり見る莉亞。扉には良人以外にふたりも男性がいる事に気づく。顔がそつくりさんなふたり。

莉亞は不思議な後景にクリクリとした瞳をパチクリさせる。

「あなたたち、誰？」

莉亞の疑問に同じ部屋にいる男性が、扉にいる3人を指差し、ひとりひとりの名前を言い始めた。

「顔がそっくりな奴らは、右が祐大で、左が慶太。もうひとりは」「知っています、良人くんでしょ」

「そうだ。それにこの家に住んでるのは、俺たち4人だ」「俺たちって、まさか

「

絶句した莉亞が言葉を失う。

第10話 大事な理由のわけ？

良人は莉亞がこれ以上ショックを受けないよう、慎重にゆっくりと話しがちだ。

「寝てしまつて、言つタイミングなかつたんだけど、片瀬さん俺たち一応兄弟で」

「そつ、良人が言つ様に、俺はこの家の住人で榎原龍之介」「つて事は、何？」「あなたたち兄弟と住むの？」

榎原兄弟を順に見終わつた莉亞が、自分を指しながら誰ともなく聞いた。

質問に答えたのは、だるそうに寄り掛かっていた祐大。

「まつそう言う事みてえだな」

「ム、ムツムリツ、4人つて……」

ワナワナと震える身体を自分の両腕で抱える様にして、力いつぱい首を横に振る莉亞。

龍之介がその様子に呆れ果てたのか、冷めた態度。

「それはお互い様だ」

「お互い様つて、あたしは女の子だし、そつちは」

話を続けようと何か言葉を探すが、思い浮かばない莉亞は口^バもる。

何が言いたいのかを察して、莉亞の代わりに祐大が答えた。

「まつ4人もいるし

野郎だしな」

祐大と莉亞の会話に、今度は慶太が理解できない口振りで割り込む。

「でっだから、何？」

「何つて、理解できるでしょ？」

「理解も何も、問題ないよ。君がここに住まなきゃね」

「行く場所ないんです……ここしか」

「それは君の都合だろ？ 場所がないなら、住むしかないだろ？」

「あたしにとつて、そんなに簡単な事じゃ」

「じゃあ、出てくしかないね」

「だから、住みたくても、色々問題があるから」

無慈悲な慶太の態度に莉亞は悟った。これ以上自分が話しても、無駄だという事に。

ふたりの会話が止まつたまま、話の出口がいつまでたっても見えてこない。

「」莉亞／＼状態を脱する為、榎原兄弟の誰かが、話を再開させる。

「色々つて、なんだ？」

莉亞は声の主の方を見た。

声の主は祐大。今の状況を進行させる為に、疑問を投げかけた。

莉亞は自分が何を言いたいのか、最後のチャンスと思つて、彼に続きを話す。

「だから 今は、襲われた……事」

「誰が？」

「あたしが、です」

「べつに、襲われてないだろ」

祐大の言葉で、莉亜は露骨に嫌悪感を出す。

「その目は節穴なの、それとも飾りもの？」

「いや、むしろ……お前が龍之介を押し倒した様に見えたぜ」「あり得ないっ！ そんな風に見えたの？」

「少なくともここに居る全員、そう思つてゐるぜ」

「そんな

」

莉亜はそれ以上何も言えなくなつた。

祐大に好き勝手に言われている彼女が、ふびんでしじうがない良人。

大事な理由のわけ？

「ふたりがもめる前に、張本人なんだから、何か言ってあげて」

一方、龍之介も納得できない様子。それまで沈黙を守っていたが、良人の呼びかけで、口を開いた。

「お互い様 だろ？」

「でも……あたしには大事な事で」

「あんたなあ、大げさだろつ。ちょっと、口と口があたつたくらいに思えよ」

「そんな……思える訳ないじゃない」

無神経な言葉が、ワナワナと体全体を震るわせ始めた。
良人だけが莉亞のおかしい様子に気づいたようだ。

「あ、あの片瀬さん」

良人は慎重かつ刺激しないように、注意しながら話掛けたが、
莉亞は涙目。

「……あな、た達は、そうかもしけないけど。あたしは 思
えないのつ！」

良人はそんな対照的なふたりを交互に見ながら、内心ヒヤヒヤして
いた。

「でつ思えないのは、なんでだよつ？」

「祐大、急かすなよ。彼女泣きかけてるだろ」

「悪かつたな

それは

悪いといふ言葉の割に、祐大は言葉とは逆の表情で舌打ちをした。

「気にしないで、ゆつくり話していいよ、片瀬さん」

「まだ した事ないの」

「だから、なにをだよ?」

「……スを」

莉亜が聞えるか聞こえないくらいの声で話す為、肝心な部分が聞えない。

思わず、榎原兄弟全員が耳を彼女の方に向ける。

「キス を」

莉亜のひとことで、一気にその場の空気が変わる。

榎原兄弟は、誰もが信じられない様子で、お互い顔を見合わせる。

みんな言葉が出ない模様。

莉亜ひとりを除き、誰もが絶句。

誰も何も言えないでいる。

重々しい空氣の中、口を開く莉亞。困惑氣味に声を出した、そこにいる人間たちの「反応」をつかがつ為。

「 何か」

「 そう…… 言われてもな」

また、思い思いに榎原兄弟はそれぞれ顔を見合せた。

「 マジ、かよ」

「 シツ祐大！」

良人がキッと祐大を睨み黙らせる。

「 今…… が、まさか」

恐る恐る龍之介が、田の前にいる莉亞を見る。彼女に確かめるような視線を送るが、何も言わず、うなずくだけだった。

祐大はまだ理解できないでいる
ふたりの様子を見て
も。

「 んな奴…… いまだき、いるか？」

彼の隣にいた慶太が、首をひねると困り果てる。

「さ、さあ……俺に聞かれてもね

「だよな

「

「とにかく、これは俺たちの問題じゃないしね。龍之介と彼女の問題だから

「首突つ込むほど、俺だつて暇じやねえよ。兄貴」

ふたりの会話で、重々しい空気が、少し変わる。

突然、良人が水を得た魚の様に、話しあした。

「とりあえず、片瀬さん、龍之介とゆっくり話しあった方が

「

「だな。良人の言つ通りだぜ」

「お前にだけには言われなくないね、祐大」

龍之介の言葉で、祐大がわざとおどけて見せた。

外国人の様な振る舞いで、両肩・両手を上げると、すくんでみせる。

「ハイハイ、さようですかつ邪魔者は退散すりやいいんだろ

第1-1話 きみを守る ？

廊下を進んで歩こうとした3人をつい呼びとめる。

「 行かないで、下さい」

莉亞は不安げな声で、部屋から叫ぶ。

3人が振り返る中、一番後ろにいた祐大が、めんどくさそな表情を見せた。

「 なんでだよ？」

「 そんな……話合つも何も、どうしたら

」

戸惑いを隠せない莉亞が、良人たち3人へ助けを求めた。

「 キミ達の問題だろ」

慶太の適格な答えに、何も言えなくなる莉亞。黙り込んで、うつむくのだった。

心細そうな莉亞を察してか、部屋の中に戻る良人。そして、彼女の傍に行くと優しい声でなだめる。

「 じゃあ、俺はここにいるから、片瀬さん」

「 う、うん。ありがとう良人くん」

会話を黙つて今の今まで、聞いていたが、納得のいかない龍之介。冷たい目をして、皮肉を言い放った。

「 ハツ俺は、野獣か猛獸扱いだな。そうなると、さじづめ良人はナ

イトつて所か」

「茶化すなよ」

「別にそんな意味で、良人くんに居てもううんじや」

「そんな事は、どうでもいいけど」

龍之介のどうでもいい、の一言で、心があれる莉亞。自分がちやんと話そつと思つたのがアホらしくなるのだった。

莉亞は近くにいた良人も含めて、ふたりをドアの方へ押し出し始めた。

「で、出てつて！ ふたりとも出てつて下せ！」

自分の部屋から追い出さうとなんとか開いているドアの方へ押し動かす。

何もできず戸惑う良人は、されるがまま、廊下に出された。それでも龍之介は自分でもわからないが、追い出されまいと、なぜかドアの隙間から腕を掴んだ。その細い腕が怒りで震えている。ドアの隙間から見えた莉亞の顔がこちらを見上げる。瞳には涙が溢れ、今にも流れそうになっていた。

「この期に及んで、まだ何かしようつて言つの？」

「いや、そうじゃない ただ俺は」

話そつとしたが、龍之介は言葉を止めて、莉亞の腕を放す。

「俺は……何？」

掴まれていた腕をさすりながら、龍之介の言葉を繰り返す莉亞。ドアノブから手を放したおかげで、人が入れるぐらにドアが開く。

莉皿はゾアの傍に居る龍之介を睨みつけた。その顔が見る見るつむかれてゐる。

「ああ、ああやめんな悪一一

「何?」

「うひー」

酒の臭いが龍之介の口からもれる。慌てて口を手で覆つた。何かが出やうなのを抑える。

震わせられた顔が再び莉皿の顔へと近づいて来るのだった。

「まさか ?」

口の中で抑えどどめている物体がなんなのか、悟つた。身をガタガタと小刻みに震えさせる莉皿。

「こ、いやああああああああーー」

オカマが叫んだかのような声が神原家ことどひぐくのだった。

きみを守る　？

想像していた事がいつこいつに起らないので、静かに目を開ける莉亞。おそるおそる開けた目の前には、なぜか男性の背中。自分で何が起こったのか、わからない。

「あつあれ？」

それでもまだ、莉亞は状況をイマイチ把握できない。

口を押されて涙を流しながら、男は　いや、良人が走って部屋を出て行くのだった。

気の毒そうに良人が出て行くのを見る莉亞。その先には祐大と慶太がいる。

今騒動でふたりは彼女の部屋の前に戻つてきたらしく、祐大は他の誰よりも速く状況を、瞬時に理解する。そして、意味深な一言。

「良人に　　するとはな」

「俺もまさか、アイツが……あんな事をするなんて」

龍之介の口振りから、おぞましい想像が莉亞の頭に駆け巡った。それを確信に変える為か、思い切つて口にする。

「ま、まさか　　口の中に？」

「自分の口を俺に押しつけたから、いろんな意味で……今、口が気持ち悪いんだよ」

オエッと、今も吐くマネをする龍之介。

そんな彼を横目に、慶太が答える。

「「Jの部屋にもんじやを吐くと、君が困ると思ったからじやないかな」

「あたしが……困るから?」

「そういうバカなんだよ、良人は」

祐大が、今はなき良人の姿を思い、出て行った入口を見つめるの
だった。

第1-2話 新しい日常 ?

「あの後、ゆっくり寝る事できた、良人くん？」

莉亞が昨晩の出来事を気に掛けて、良人に声を掛ける。
朝日の光がキッチンの窓から入り込み、部屋全体を明るく照らしている。

寝起きで部屋が少し眩しそうな表情の良人。

「うん、ま～なんとかね」

キッチンにあるテーブルへ、焼けたパンを皿に並べながら、良人は寝ぼけ声で答えた。莉亞も冷蔵庫から飲み物を取り出して3人分を用意。

朝ごはんの準備が終わると莉亞だけ座る。祐大を挟んだ状態で良人と会話する。

「あの、昨日はありがとね、良人くん」

「いや、俺が勝手にした事だから、気にしないで」

「うん。優しいんだね」

「いやあ、そんな事ないよ」

莉亞の笑顔に良人は顔をだらしなく緩ませた。
朝ごはんの準備もせずにただ座っていた祐大が、焼いたパンを片手に寝起きの悪さを發揮する。

「なあに、ニヤついてんだよ。気持ち悪いいな」

「見えてもないのに、変なこと言つなよ」

「お前の事だから、だらしない顔でもしてるのかと思つてな」

「そんな顔……してないよ、俺は」

「さいですか。ほんじゃ、朝からお熱い事で」

祐大はてんこ盛りの嫌味を、のし付けた言葉で、良人に返した。シンクにいた良人が、何か言おうと彼の後ろ姿を睨んだ。ふたりの会話に割つて入る慶太。

「ふたりともさ、朝から静かにしたらどうだ?」

ほとんど呆れ顔。ふたりのケンカに見兼ねて、慶太がキッチンの入口でふたりに声を掛けた。

朝から、余計な事を言われたくない祐大は、彼に減らず口を叩く。

「兄貴、タダの……日常会話だよ」

慶太はそんな嫌味に応える事なく、無視。キッチンの中を歩き進む。

それまで、良人は歯を食いしばった険しい顔をしていた。今はいい気味そうに、コッソリとひとりで笑みを浮かべるのだった。

新しい日常　？

ふたりのやり取りを見ていた良人は、晴れやかな表情。慶太へ爽やかな朝の挨拶をした。

「慶太、おはよう」

「慶太さん、おはようございます」

近くを横切る慶太に、昨日の一件もあって、彼に目を合わせられないでいる莉亞。

慶太は横目でチラツと莉亞を見たが、何も反応しない。涼しい表情で、彼女の事を華麗にスルー。コーヒーを作る為、キッチンの奥へ。

良人が慶太の耳そばまで近づくと、ぼそぼそ何か言っている。

「慶太、彼女声掛けたんだから、応えてやってくれよ

その言葉が気に触つたらしく、露骨に嫌そうな顔をする慶太。ジッと彼を睨む。

良人はそれでも動じる事なく、慶太に向かって、ニッコリ微笑んだ。

観念した様子の慶太はため息ひとつ吐く。それから、仕方なく莉亞へと挨拶を返すのだった。

「おはよう」

慶太が、それでも莉亞を見る事はなかつた。
良人はふたりのそんな様子に、何も気づかない。得意げな顔をして、彼の耳元でささやく。

「分かつて貰えて、よかつたよ」

「満悦な笑顔で、自分の席に座る良人。

隣には少し元気がなくなつた莉亞が食事を取つている。

「そう言えば、片瀬さん、俺たちと同じ大学だよね?」

「うん、そつなんだけど……」

食事の手を止めた莉亞、それ以上何も言えないでいる。

「どうかしたの?」

「その……できれば、誰か一緒に

「お前、俺らと同じ大学なわけ?」

ふたりに対して、無関心だった祐大が、急に会話へ割り込んできた。

「うん。一緒に来てもらえたって」

「わりいけど、お前の子守なんかできる程、暇人じゃねえよ

食べ終わった皿をそのまま残し、祐大はそう言つて、さつさとキツチンを出て行つた。

すぐさま、良人が莉亞に声を掛ける　このチャンスを逃さんとばかりに。

「じゃあ、片瀬さん。俺が一緒に行くから」

「ホント?」

「うん、だから安心してよ」

「ありがとうござります」

「ううん。最初から案内するつもりだったからね」「よかつた。ひとりじゃ、少し心ぼそかつたし……」

「じゃつ、元気出して、『飯食べて』

「うん」

ふたりとも満面の笑みで、朝食を再開する。

コーヒー カップだけを持つた慶太が、楽しそうなふたりを横目にキッチンから出て行くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4275p/>

プラザーズLOVE

2011年11月24日20時59分発行